

**宮城の教育振興基本計画  
策定に関する意見聴取会  
実施結果**

平成20年10月

**宮城県教育庁教育企画室**



## 宮城の教育振興基本計画策定に関する 意見聴取会実施結果について

### 1 目的

教育基本法第17条第2項の規定に基づき、本県教育の振興に関する総合的かつ計画的な推進を図るため、基本的な方針、講ずべき施策の方向性等を示す教育振興基本計画を策定するに当たり、広く県民の意見を聴取し、今後の検討に生かしていくため、県内7か所で開催した。

### 2 地区毎の開催結果

地区	開催日時	会場	意見発表者	傍聴者数
大崎	平成20年 7月6日(日) 10:00～12:00	宮城県 大崎合同庁舎 大会議室	・加美町立広原小学校 教諭 中川美津子氏 ・色麻中学校 P T A 副会長 佐々木正彦氏 ・鹿島台母親クラブ 会長 石井洋子氏 ・社団法人おおさき青年会議所 次世代育成委員会副委員長 手島祐弥氏 ・宮城県地域婦人団体連絡協議会 遠田郡婦人会 副会長 寺尾登茂代氏	25人
石巻	平成20年 7月6日(日) 14:00～16:00	宮城県 石巻合同庁舎 大会議室	・石巻市立渡波中学校 教頭 菱沼伸一氏 ・石巻市けやき教室 室長 綿引雄一氏 ・石巻養護学校 同窓会 会長 阿部美幸氏 ・日本製紙株式会社石巻工場 事務部長代理兼総務課長兼教育理事 太田宗史氏 ・東松島市青少年健全育成市民会議 広報部 佐々木松子氏	13人
仙南	平成20年 7月13日(日) 10:00～12:00	村田町中央公民館 大ホール	・柴田町立東船岡小学校 教諭 綱川誠氏 ・柴田町立船岡中学校 教頭 永山晋氏 ・子どもの杜エール 代表 櫻井美砂子氏 ・特定非営利活動法人仙南広域工業会 常務理事 工藤忠雄氏 ・大河原管内スポーツ少年団連絡協議会 会長 村上利仁氏	17人
仙台	平成20年 7月13日(日) 14:00～16:00	宮城県庁行政庁舎 2階講堂	・名取市立増田小学校 校長 根来英雄氏 ・多賀城市社会教育委員 阿部豊子氏 ・仙台高等学校 校長 石井正樹氏 ・高機能広汎性発達障害児親の会 (シエルの会) 元会長 菅野義久氏 ・仙台市子育てふれあいプラザのびすく仙台 館長 伊藤任佐子氏 ・仙台市スクールガードリーダー 小幡昭夫氏	33人
登米	平成20年 7月21日(月) 10:00～12:00	宮城県 登米合同庁舎 大会議室	・登米市立米山西幼稚園 技術主査 星良氏 ・登米市立佐沼小学校 校長 片倉敏明氏 ・特定非営利活動法人すくすく保育研究所 代表理事 堀田菜菜江氏 ・登米市倫理法人会 会長 伊藤俊郎氏 ・とよさとマイ・タウンクラブ 会長 佐々木幸一氏	22人
気仙沼 ・本吉	平成20年 7月21日(月) 14:00～16:00	宮城県 気仙沼合同庁舎 大会議室	・本吉町立津谷幼稚園 園長 三浦三枝子氏 ・本吉町立津谷中学校 教諭 菅原定志氏 ・学校法人畠山学園東陵高等学校 副校長 吉田俊雄氏 ・スクールカウンセラー 星美保氏 ・気仙沼市青少年育成協議会 会長 岡本寛氏	13人
栗原	平成20年 7月27日(日) 10:00～12:00	宮城県 栗原合同庁舎 第1会議室	・栗原市 P T A 連合会 会長 石川和彦氏 ・栗原市立若柳中学校 校長 千田哲氏 ・栗原市こども会育成連合会 会長 後藤哲弘氏 ・栗原市スポーツ少年団 副本部長 鹿野有三氏 ・栗原市社会教育委員 菅原敏元氏	13人

### 3 意見聴取会での意見発表等概要

#### (1) 大崎地区

日 時：平成20年7月6日（日）10:00～12:00

場 所：宮城県大崎合同庁舎1階大会議室（大崎市古川旭4-1-1）

出席者： 教 育 次 長	菅原通悦	意見発表者： 加美町立広原小学校
		教 諭 中川美津子氏
教育企画室長	安住順一	色麻町立色麻中学校PTA
		副会長 佐々木正彦氏
教職員課長	安井順一郎	鹿島台母親クラブ
		会 長 石井洋子氏
義務教育課長	竹田幸正	社団法人おおさき青年会議所
		次世代育成委員会
高校教育課長	高橋 仁	副委員長 手島祐弥氏
		宮城県地域婦人団体連絡協議会
生涯学習課		遠田郡婦人会
社会教育専門監	渋谷秀昭	副会長 寺尾登茂代氏
北部教育事務所長	佐藤信男	

#### <意見発表要旨>

##### ○ 中川 美津子 氏

- ・ 私の勤務する小学校では、平成19年度まで「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」の研究指定を受け、「みんなのために気づき、考え、行動をしよう」を合言葉に地域や家庭の協力を得ながら、道徳教育の研究を実践してきた。ここから得られた成果と課題を生かしていくことを今年度の重点としている。
- ・ ①なぜするのか、②そのためにどうするのか、③できたこと を、三つの柱として児童会活動等に取り組みさせている。「あいさつ」、「時間を守る」、「整理整頓」を各学期の重点目標とした。子ども達は、前述の三つの柱を考え方の基本として、人から言われてやるのではなく、自ら考えて、進んで取り組むことができた。
- ・ 児童の生活習慣改善のため、一昨年度から生活点検表を活用している。保護者との連携を深めるため、家庭から回収した生活点検表の傾向を、参観日の話題に取り上げている。回収率が高まるよう、工夫しているところである。
- ・ 道徳の授業では、児童の課題意識（切実感）を持たせる問題解決型指導に取り組んでいる。「思いやりのある子とは、どういう子のことか」を考えさせるために、「どんな時・どんな心で・どうすればよいのか」を資料の中に出てくる主人公の行動を通して考え、そこから得たことを「コツ」として生活に生かし、自分自身を高めていくようになって欲しいと考えている。意識調査の結果では、道徳の時間に学んだことを生活に生かしている児童が11パーセント増加した。さらに高めていきたい。
- ・ 保護者の支援を得ながら「自律の心」を育てている。保護者に「なぜ家庭学習が大切なのか」を説明してから「家庭学習の手引き」を配布し、児童にも、学習が必要なわけを将来の夢・職業と結びつけて、学習に取り組ませるようにした。夏休みの学習のしおりは、5月に実施した学力テストの個人結果と学級の傾向を合わせて配布した。
- ・ 言葉遣いの指導に力を入れて取り組んだ成果が見られる。「良いまねをしよう」「良いお手本を見せてください」と声をかけ合うようにしている。
- ・ 児童が愛情を求めるシグナルが、生徒指導上の問題として様々な形で現れてくる。このようなシグナルを発している場合でも、家庭の中に受け止めてやるべき人がいなかったり、どのように受け止めればよいのかが分からず、悩んでいる保護者がいる。担任が一人で抱え込まず、より適切な指導や支援ができるよう外部の専門的な機関との連携を図るため、校長自らが教員の支援に取り組んでいる。また、学校の中でもチームを組んで、外部の専門的アドバイスを受けながら、解決の糸口を見出そうと取り組んでいる。
- ・ 保護者とのやり取りの中で学んだことは、相手の話をよく聞くこと、直接会って話をするのがいかに大切かということである。保護者は、自分の子どもを大切に思ってくれているのだと納得すれば協力してくれる場合が多い。保護者が今の状況に課題意識を持っていない場合には、チームを組んで根気強く関わり続けていくことが必要である。

- 生活点検表の集計結果から、学校生活に慣れてきた2年生以上の子は、「月曜日は、週の始まりだからがんばろう、そのためには朝食を好き嫌いなくしっかりと、歯磨きもきっちりしよう」とする習慣が付きつつあり、保護者も協力してくれていることが分かった。課題は、週明けに比べて、週末や土日に気がゆるみがちで、テレビの視聴時間も長くなる傾向が見られることである。
- 「共に見つめ合い、共に支え合う児童の育成」が我が校の研究テーマであり、これを私自身のキーワードとして、人との関わりの中でいつも大切にしていきたいと思っている。
- 自分の子どもの頃の経験を振り返ると、小学校の先生や、母親、祖父母に褒めてもらうことが嬉しくてがんばっていた。褒められることは、自分の良さを認めてもらうことで、自分の良さに気づかせてもらうことになり、自信が付く。つまり児童は、自己肯定感を得る。自己肯定感が、規範意識や自分を律する心につながっていくのである。
- 意識調査の結果から、命に関わるようなこと、他人を傷つけるような行いをした時に、地域の人が厳しく叱ってくれていることが分かった。また、保護者は、喧嘩、ウソ、宿題忘れの時に厳しく叱っている。
- この地域では、おじいさん、おばあさんも一緒に子どもの教育を支援している様子を感じ取れる。父母の良きお手本になっているようだ。
- 規範意識や道徳心は、周りの大人が良いことは認め、悪いときには叱る、というように愛情を持って関わっていくことで育まれていくことに気づかされる。
- 地域に住んでいる人が好きだから「この地域が好き」と子どもが胸を張って言うことができる。

○ 佐々木 正彦 氏

- 色麻町でPTA活動をして20年になる。山形大学の教員であり、同大附属中学校の校長をしている。また、県内の幾つかの高校や小学校の学校評議員もしている。そのようないろいろな立場で教育について意見を述べたい。
- PTA活動は、次のような観点から、最も身近で最適な生涯学習の場であると思う。
 

①多くの人との交流の場、	⑥学校とは何かを考える場、
②子どもの教育について学ぶ場、	⑦親とは何かを考える場、
③自分を見つめ、自分を変える場、	⑧教師とは何かを考える場、
④自分の考えを表現し、他に理解してもらう場、	⑨日本社会全体を考える場、
⑤社会・地域・行政のあり方考える場、	⑩生涯教育に最適の場
- 「命の大切さ」「学ぶことの大切さ」を計画の柱としてほしい。
- 山形県鶴岡市で20年3月に、部活の練習時に何人かの子どもを乗せていた親が一時停止違反で衝突し、同乗していたよその子どもが死亡する事故があった。山形県教委は「相乗り禁止」を通達し、厳しく対応している。これを機に、公共交通機関の利用や、「自分の子は自分で運ぶ」といった親の関わり方、計画的な部活運営など部活のあり方も変わりつつある。何より命が一番大切であるということを保護者に納得してもらうことから始めている。また、部活の土日連続禁止も通達された。宮城県でも、部活に過熱することない文武両道、学ぶことの大切さを意識することが必要である。
- 夢を壊すサンタクロースの真相暴露の放送や、夜中までやっているバラエティー番組、メールやネットが自由に出来る携帯電話をそのまま与えている父母等々、社会の姿勢に問題も多い。社会全体で子どものことを考えることが大切である。

○ 石井 洋子 氏

- 「まちの子はみんな我が子」を合い言葉に、児童館を拠点とした母親クラブの活動をしている。
- 人形劇公演、子育て講演会、行政の子育て支援事業への協力などを行っている。活動の視点を外に向けて取り組んでいるが、最初から出来たわけではなく、日頃の活動から徐々に培われたものである。いろいろやるうちに我々の企画力も向上し達成感も得られ、もっと学びたいと思うようになり、他の人にも伝えたいという思いが広がっていく。母親クラブは、生涯学習の側面が強いと感じている。
- 子どもと共に、親、大人も常に学び続けることが大切だと考える。教育の原点は家庭である。学校で過ごす時間も長い、衣・食・住や生きる力を学ばせる場は家庭であり、そこで父も母も常に学んでいく姿勢を持つことが大切だ。
- 子育てに父親の出番は不可欠である。4、5年前にPTAから立ち上がった「おやじの会」は、父親が子どもを遊ばせる活動をしている。男は群れにくい、集まれば飲み会、といった印象もあるが、サッカー教室やコンサート、アウトドアなど企画はダイナミックであり、期待させる力を感じる。
- 最近共働きも多いので、地域の皆さんの助けが必要である。鹿島台には家庭教育推進協議会があり地域の子ど

もに関係した団体や老人会などが行政と連携できる体制がある。我々の母親クラブも加盟し、互いに支援をしあっており、こうして裾野が広がると思っている。

- ・ 活動する上で、行政に人材バンクの充実をお願いしたい。作りっぱなしではなく、その後のメンテナンスもお願いしたい。また、行政で事業を行う際、次の世代を担う人づくりを意識してほしい。全て行政がお膳立てして子育て中の親を参加させ、支援するだけでなく、若い親たちに自ら企画し実施させるようなプログラムを用意し、行動する親たちを育成することを考えてほしい。
- ・ 私は、小中学校の図書館補助員もしているが、学校の図書館がお寒い状況である。本はたくさんあるが、積んであるだけで活用されていない。図書司書が配置されず、図書館が開けない。人づくりを考えた時、学校教育には図書館、本は不可欠である。本と子どもの間に司書がいて、選んだり紹介したり、貸し借りの際、本について話したりすることが大事である。宮城の将来は図書室からといっても過言ではない。

#### ○ 手島 祐弥 氏

- ・ 社団法人おおさき青年会議所で、100人の子ども達が4泊5日をかけて歩く事業「おおさき100km徒歩の旅」を主催している。その目標は次のようなことである。
  - ①体験から子どもの「生きる力」を醸成
  - ②地域リーダーとしての学生ボランティアの育成
  - ③社会人ボランティアにとっての生涯学習の場の創造
  - ④地域コミュニティの活性化
  - ⑤私達が住む「おおさき」の魅力の探究
- ・ 昨年は、雅楽演奏会も実施した。日本の伝統文化に触れてもらうため、DVDを作り市内の学校に配布した。これらの事業を通して高校生など学生達と触れあい、彼らの持つ可能性の大きさを認識するとともに、新たな課題を感じた。そこで、地域活動を「参加型」から「自立型」（自発型）へ発展させるため、今年は大崎地域内で高校生が企画するまちづくり事業を募集し、助成する事業「大崎まちづくりチャレンジ助成制度」を立ち上げた。彼らに達成感を持ってもらい、自ら考え行動する人づくりを進めたい。鹿島台商業高校と古川工業高校から応募があり、8月にプレゼンをしてもらい助成の可否を決定する予定である。
- ・ 子どもたちが達成感を持つことがとても大事である。小さな目の前の目標達成の積み重ねがあつて、自分の企画したものが全て終わった時に大きな達成感を得られる。私も青年会議所に入り、様々な事業を行った中で感じた達成感は大きかったし、次への意欲につながっている。また、自分ならこうすれば違うことが出来るかな、などと自分自身を見つめ直す機会にもなる。
- ・ 我々の団体にも次の世代がなかなか入ってこない。ジュニアリーダーの活動も参加型のイベントが多いようだが、自発的に考えられる次世代を育成して行く工夫が必要だと感じている。
- ・ 自ら考え行動する人を育成することが大事である。これを継続するには、同じ年配者がそのまま教えていくのではなく、育っていった人がまた下の人を育てていくというサイクルを作ることが大事だ。

#### ○ 寺尾 登茂代 氏

- ・ 地域の中で話（わ）と和（わ）と輪（わ）を広げよう。もっと大きな輪にしていきたい。対話すること、和やかになること、手をつなぐこと、そして地球規模で手を携えることができれば、という思いでいる。
- ・ 「自分たちがお世話になっているのだから、何かお返しをしなければ」という気持ちを持てる子ども達が私の行政区では育っている。4～5年前から、8月の第1日曜日に、中学生が朝6時に集まり地域全体で使っているゴミ収集コンテナを洗っている。中学生が少なくなってきたので、小学生も、父母も、と参加者が増えてきた。
- ・ 婦人会活動で、四川省地震への募金に取り組んだところ、3万円がまとまり、過日送金した。その後まもなく栗原市の地震があり、これには14万円集まった。地域にまとまる力があると感じた。
- ・ 私の取り組んでいる「まちづくり会議」で「食育」が大きな問題となっている。なぜなら、我が町の国民健康保険、医療介護の未収金が3億円を越えている。給食費の未納も多い。集金する先生方も大変だと思うが、収めたくても収められない場合もある。子どもが2人、3人ともなると、給食費を一気に払うのも実は大変である。分割払いができるの良いのではないか。授業も教えることができる栄養教諭という新しい制度ができたので、宮城県全体に配属して、食育につなげていただきたい。学校教育の中で、あるいは地域の中でも、それなりの系統立った食育がなされれば、医療費は半減できるのではないかと考える。誰が実行するか、ということは課題としてある。我々婦人会としては、はやね・はやおき・あさごはんの啓発資料の配布を行っている。
- ・ 私が会長を務める「美里町いきいき学園同窓会」は、会員が年々増加しており、地域でスポーツの交流をしたり、

会員研修を行ったり、地域の中で手をさしのべなければならない人に手を貸すなど、生涯学習の拠点として活躍している。昨年は、救命救急講習を30名で学び、全員が合格した。大人に地域でがんばってもらうためには、それなりのレッテルを貼ってあげたり、パスポートをあげたりして、気持ちを良くしてあげると、大きな力になるのではないかと考えている。

- ・ 学校給食については、自校方式とセンター方式、ドライ方式とウェット方式など様々あるところだが、どれが一番良いのか、勉強もなかなか大変である。文科省からはセンター方式でドライ方式が良いとの通達があったようだ。子ども達のためとはいえ、整備に7億7千万円かかるという。正直、「困るな」という気持ちがある。自校方式であれば、調理している匂いや湯気が立ってきたり、運んできている音が分かったり、食育という観点では意味深いものがあるが、センター方式で温かいものは温かく、冷たいものは冷たく運ぶためには何台もトラックが必要になり、いろいろ考えると7億では足りないのではないかと、と老婆心ながら思っている。
- ・ 地域の中での原点は、向こう三軒両隣。そこに住むおじいちゃんもおばあちゃんも心を通じ合わせ、昔の良さを引き継ぎ、若い子ども達に伝えたい。先日、小学校の豆腐づくりに参加したところ「おばあちゃありがとう」という手紙をもらい、非常に嬉しかった。このようなことを学校との関係の中でコーディネートして、学校の方を向いてくれる人の教育に是非取り組んでいただきたい。
- ・ 私がこうしていられるのも体が元気であるからこそ。「寝たきり老人」になりたくないで「出たきり朗人」でいたい。

## <意見交換> テーマ 社会全体で教育の向上に取り組むために ～学校・家庭・地域の協働を進めるには何が必要か～

### ○ 安住 教育企画室長

- ・ 貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 国がこのたび策定した教育振興基本計画では、全体を貫く基本的な考え方として「横の連携：教育に対する社会全体の連携の強化」を挙げており、示された4つの基本的方向性としても「社会全体で教育の向上に取り組む」を第1番目に掲げている。さらに、特に重点的に取り組むべき事項として9つが挙げられている中にも「地域全体で子ども達をはぐくむ仕組みづくり」がある。
- ・ このような点について、皆様と議論したいと考えた。また、今回意見発表をいただいた5名の方々のお話が「地域」「家庭」に関するものが多かったことから、このようなテーマを設定させていただいた。
- ・ これまでは、教育というと基本的に「学校が主体となって」取り組むという考え方が多かったが、これからは、地域が主体者として学校の教育にも関わってくるようになる。それぞれのお立場から、どのような連携を図り、子どもを育成していけばよいと思われるか。

### ○ 佐々木 正彦 氏

- ・ 計画の策定では、項目を全部埋めて総花的なもので終わりとすのではなく、全体的に見て、宮城県は特徴のある教育だな、と分かるように策定していただきたい。国が掲げる「地域と学校の連携については」、宮城でも行うようにコンセプトを持っていただきたい。学校の教育活動がどういう目標を持って行われているかが、地域に確実に流れていることが大切である。宮城県で、子どもがいない家庭にも学校便りなどが行き渡っているかといえば、まちまちであり、良くやっているところもあると聞いているが、地域に対し、協力してくれ、と言っても情報が流れていないとどう協力してよいか分からない。連携を取るためには共通認識と、間に入るマンパワーの育成も非常に大事になってくる。情報の流し方にも工夫が必要だ。
- ・ 地域には家庭も入るので、家庭の中で教育に対するきちんとした理解を仕掛ける必要がある。
- ・ 教育では、学ぶことを基本としていくことが大事である。新指導要領の中でも「生きる力」が重要な方針として維持されているが、「現代を生き抜く力」のことであり、サバイバル能力のことではない。最も大事なものは基本となる能力であり、基礎学力だと思う。これを社会全体で子どもに付けていこうということであろう。
- ・ 子どもが望めば、何でも与える時代になってしまった。「子どもに教育だけは受けさせよう」と言っていた時代が懐かしく感じる。勉強が大事だという考えは、親にも浸透させる必要がある。勉強部屋を持つことが大事なのではなく、こたつに座っていても、親と連立方程式や漢字の書き順について会話をしながらでもよい。こっちはほうが大事だ。

- ・ 全国学力テストの結果を見ると、宮城県は小中学校全て平均以下と、良くないデータが揃ってしまうが、その辺りの底上げは基本的に大事であろう。
- ・ 志は高くとも、やることは地道で、学校でマラソンをしてへとへとになって帰ってきても、家で1～2時間の勉強を子どもにさせる、そういう家庭を作っていきたいと思っている。

○ 中川 美津子 氏

- ・ 学校側からの情報提供について、学校では区長を通じて、学期に1回程度、「心の教育だより」を地域に配布しており、道徳教育や講演会などの案内をしている。このことにより、「生活点検表」への理解が得られるようになり、回収率が大幅に上がった。また、コメント欄を見やすくしたら、子育てしているおばあちゃんが、生活点検とは関係ないことだが、学校への思いを書いてくださり、相互交流が生まれている。これを繰り返すことが大事だと考えている。
- ・ 学力向上については、学校でも大変な課題である。加美町では町の予算で6年前から学力テストを行っており、この分析結果と自校採点結果、学級の傾向等を分析結果の見方などと併せて参観日に配ったところ、結果を見て嬉しかったこと、家で子どもが本読みなどががんばっている様子、結果を見てがんばるようになった子どもの話などを父母や祖父母が伝えてきてくれるようになった。ちょっとしたことがきっかけで、相互交流が生まれてうまく協力していただき、やっていけるのだ、ということを実感した。このようなことを地道に積み重ねていきたいと思っている。学力テストの診断結果も、意味づけをするかどうかで、きちんと見てくれるかどうかで違ってくるということも実感した。

○ 石井 洋子 氏

- ・ 親は、学校の情報をとても知りたいと思っている。そのニーズを上手く吸い上げ、開かれた学校づくりを望む。講演会や参観日、PTAの行事がいつある、という情報があれば、そこへ親が出かけて行って、それが小さなきっかけとなり、相互交流が生まれる。それがないと、親たちは井戸端会議で学校の悪い情報ばかり耳にしてしまう。
- ・ PTAの広報誌を公民館に貼って地域に知ってもらうことを提案したが、「子どもの顔写真が個人情報に引かかる」ということで、叶わなかった。壁があることを感じ、残念であった。
- ・ 鹿島台商業高校は、「鹿商だより」を回覧で回してくれており、興味深く読んでいる。地域にとって、とても良いことだ。義務教育でもこのようなことを行っていたideきたい。
- ・ 母親クラブとして、講演会など、学校のお手伝いをさせていただきたいと思っているが、学校の先生の姿勢によって、積極的にセットしてもらえたり、もらえなかったりするのので、どの程度の距離を取ればいいのか分からないことがある。
- ・ 学校に積極的に協力するボランティアを募って、その人達での交流の機会を与えていただくと、地域の人はもっと学校に行きたがると思う。

○ 手島 祐弥 氏

- ・ 私情報も重要だと思っている。「大崎まちづくりチャレンジ助成」の募集に当たり、20日ほどの期間があったが、その半月前から学校にお話しに行ったところ、総体や中間試験で子ども達は大変だ、と聞いた。学校に行っ初めて分かったのであるが、大まかなものでもいいので、学校の行事予定など、ホームページなどで公開して下さると、事業の企画や活動がしやすくなる。
- ・ 行政側で人材の取りまとめをしていただけると助かる。さらに、それに関する掲示板があると、「こういうことを教えてくれる人はいないか」「米のことなら俺に聞け」などといったやり取りができ、面白い。
- ・ 1月31日に大崎地域の中学生が「おおさきサミット」を開き、「地域のために何ができるか」が話し合われた。私ならどうするかと考えてみた。教育だけでなく、バンド活動でも人形劇でも合唱でも何でも良いので、それによってどんな地域貢献ができるかを考えていったら良い。例えばバンド活動をどんどんやる上では、関係者とコミュニケーションを取るようになる。その過程で、目上の人とはこういう風に会話しなければならない、ということも分かってくる。それも教育である。年上、年下、いろいろな人と交流することによって「もう少し勉強しなきゃ」「もっと考えなきゃ」という気付きが生まれ、成長できる。このような点も踏まえ、自ら考え、行動する人間の教育につながる教育振興基本計画を策定していただきたい。

○ 寺尾 登茂代 氏

- ・ 親としては、学校は安心して子どもを送り出せる場所であって欲しいと望むが、学校の先生方には悩んでいる人



がたくさんいる。何らかの形でこのような先生をサポートしてあげることが必要である。同じ学校の先生とは話せないけど、他の学校の先生とは話せる、という人もいる。学問はしてきたが、親や先生との付き合いやコミュニケーションが下手な人も最近増えてきているように思う。

- ・ これを解決する一つの手立てとして、外部評価制度を取り入れている教育委員会がある。これを行い、先生をサポートしてあげるのが地域力ではないか。
- ・ 法人として、子どもを一人預かっている。ある高校に通っており、毎朝6時半に来て朝ご飯を食べ、弁当を持たせ学校に行き、学校から帰ってご飯を食べ、お風呂に入ってから家に帰る、という生活をしている。一生懸命勉強して、ヘルパーの2級の資格を取った。最近の希望としては福祉大学に行きたいと言っている。是非実現させてあげたいが、母子家庭であり、この母親があてにならないので、母親代わりをしている。地域の中で小さなところにも救ってあげたいところはたくさんある。おばあちゃん力を発揮していきたい。

#### ○ 竹田 義務教育課長

- ・ 貴重な意見をたくさんいただき、感謝している。様々なことを考えさせられた。
- ・ 「まじめにコツコツ努力することは大切なのではないか」という佐々木さんの意見があったが、我々も学力の底上げが最も大事だと考えている。テストの結果が全国平均を下回っているからではなく、実際に子どもをどう育てるかが大切なのであり、そのために確かな学力は必要不可欠である。学力向上に向けては、今後も継続して推進していかなければならないと考えている。
- ・ 学校の質をどう高めるかについては、県内の校長先生方全員が考えていることである。学校自体の取組も重要だが、今はそれだけではなく、家庭や地域の皆さんの協力がなければそこまでは行き着かない。この辺りについて、今日はたくさん御意見をいただいた。
- ・ 「開かれた学校」を数字で見ると、小中学校が授業公開を行っている日数は、年間平均14日間、ホームページでの学校情報の提供は、小学校で6割、中学校では5割程度である。学校に外部の方を招き、その意見等を学校運営に生かしていくという学校評議員制度を小学校で86パーセント、中学校で85パーセントで導入している。学校評議員制度を実施していなくても、地域の方々の協力が得られるような類似した委員会等を持っている学校もある。

#### ○ 渋谷 生涯学習課社会教育専門監

- ・ たくさんの提言をいただき、感謝する。
- ・ 協働教育で何を育てるのか。①子ども達にとって、学ぶ意欲、問題解決能力、協働する力が育つ②地域の人々にとって、人間力、生き甲斐感が得られる③地域にとって、社会資本が充実する  
学校も地域も充実し、循環が生まれるものと考え、教育庁全体で横断的な事業として行っている。
- ・ 大崎管内では、平成17年度から協働の取組として、5小学校で「コラボスクール」に取り組んでいる。地域と協力した教育活動を行い、様々な効果を発揮している。
- ・ 情報について、たくさん御提言をいただいた。地域の公民館、市民センターなどで情報を取りまとめ、発信するシステムを現在検討している。学校や地域のニーズに応えるコーディネーターの育成を特に進めていこうと考えている。本日いただいた御意見を検討に反映させたい。

#### <傍聴者からの意見要旨>

- ・ 学校は学力を付けるところだ、という佐々木さんの意見に共感した。しかし、地域の食育など、何もかも学校に入ってきている。総合的に子ども達を育てるためだというのは分かるが、本当に学力を育てるには、地域は地域として子どもを教育する仕組みを作るようにしないと、学校の先生方が子どもに向き合う時間が少ない。教員の多忙化問題は、県教委として補助することが大事である。
- ・ 国の基本計画に数値目標が入っていない。県として、予算がかかることを国にきちんと言っていないと現場が大変である。
- ・ 「宮城県の教育の希望は図書館にある」という意見に同感である。
- ・ 国の計画にある「教員が子ども一人ひとりに向き合う環境づくり」をどう具体的に実行していくのか、行政で考えていただきたい。学校現場は、子どもの日記に赤ペンを入れる、テストの丸つけをする、教材研究をする、通信票を作成する、といった当たり前のことが勤務時間内に終わらない状況にある。新しい学習指導要領の実施により、時間数、コマ数が増えるので、ますます深刻な状況になってくる。学校・家庭・地域の協働を進めるのは非常に重要なことだが、目の前の子どもや保護者と向き合う時間をどう保障していくか、条件整備が必要である。

- ・ 貧困と格差拡大の問題は、学校現場、地域だけでは抱えきれないものを行政がどう対応していくか、が大事な点である。
- ・ 今回の意見聴取会で、高校に関する話題がなかった。教育の連続性を考えると疑問である。
- ・ 近頃、教員という仕事に魅力がなくなってきて、教員を志望する若者が減るのではないかと、言われている。教員免許更新制、職員評価など、いきいきとして学校で働くことができなくなることが予想され、心配している。
- ・ 教育振興基本計画であるので、大きなベースが必要だが、予算の裏付けもないようでは、うまくない。
- ・ 学力向上に図書館は欠かせない。高校には図書館司書がいるが、小・中学校に司書がないことが、子ども達が本嫌いになる一つの原因を作っていると思う。今回、文部科学省から各自治体に、図書館のためということで、交付税予算が来ている。そのうち、各自治体が、どのくらい図書館に予算を使っているのか、きちんと調べて欲しい。図書館の本を増やすだけでも、子ども達にとっては有意義だと思うので、重点的に取り組む事項にも入っているので、しっかりと活用していただきたい。

(2) 石巻地区

日時：平成20年7月6日（日）14:00～16:00

場所：宮城県石巻合同庁舎5階大会議室（石巻市東中里1-4-32）

出席者： 教 育 次 長	菅原通悦	意見発表者： 石巻市立渡波中学校
		教 頭 菱沼伸一氏
教育企画室長	安住順一	石巻市けやき教室
		室 長 綿引雄一氏
教 職 員 課 長	安井順一郎	石巻養護学校同窓会
		会 長 阿部美幸氏
義務教育課長	竹田幸正	日本製紙株式会社石巻工場
		事務部長代理兼総務課長
高校教育課長	高橋 仁	兼教育理事 太田宗史氏
		東松島市青少年健全育成市民会議
生涯学習課長	後藤康宏	広 報 部 佐々木 松子氏
東部教育事務所長	百井 崇	

<意見発表要旨>

○ 菱沼 伸一 氏

- ・ 我が校の大きな教育課題である「不登校問題」の解決と「学力の向上」を目指していくために、現在校内で行っている様々な取組や、保護者や地域などとの連携に加えて、今後は小中学校の連携を進めていくことが極めて重要だと考えている。
- ・ 平成5年からのある調査結果によれば、不登校体験者が、不登校で学校に行けなかったことに対し、「行けばよかった、後悔している」「仕方なかった、どうしようもなかった」と答えている割合が合わせて7割になっている。
- ・ 学力向上の問題も、全国あるいは県の学習状況調査、また本校での日ごろの定期考査からも、さらに努力が必要な状況である。不登校の問題と同様に、高校受験など、生徒の将来の夢の実現に対しても大きな障害となる可能性のある緊急な問題である。
- ・ また、小学校から中学校へ進学すると急激に不登校生徒が増えるという、いわゆる中1ギャップが問題になっているが、環境が変わり、新しい人間関係づくりのトラブルや、学業の不振などが大きなきっかけになっていると思われるので、学力の面にも中1ギャップがあるのだと思う。
- ・ このようなことから、小学校と中学校のスムーズな接続、連携が非常に大切になるが、現実にはまだまだ十分にはできていない。具体的には、小中学校間で十分な引き継ぎがなされているか、小学6年生やその保護者が中学校入学に対しての不安や心配を解消できる機会や場があるか、ということなどである。
- ・ 不登校問題にしる、学力向上の問題にしる、対蹠的な対応以上に、小学校・中学校が共同した予防・開発的な取組が今後さらに求められる。
- ・ 義務教育の9年間で一貫した、継続した指導や、教員、保護者が9年間子どもを見守っていくという体制が必要である。
- ・ 具体的な取組として、小中学校の教員がお互いの学校の授業を参観したり、話し合いの機会を持ったり、小中学校の児童生徒間の交流、保護者を巻き込んだ交流などが考えられる。本校の教員も小学校の授業を参観してカルチャーショックを受けるとともに「小学校の子ども達の様子や学習の進め方が直接見られてよかった。」などの感想を寄せている。このような日常的で、実現可能な取組を継続していくことが、引き継ぎとしての大きな役割を果たすようになると思う。
- ・ 小中学校の教員が、学習の様子や定着状況を互いに確認し合うことができれば、小学校での学習を中学校で発展させ、学力向上につながる。
- ・ 中学校に配置されているスクールカウンセラーを、状況に応じて小学校でも活用していくことも大切である。
- ・ 何か特別なことがなくても日ごろから、保護者、地域と、お互い顔が見える関わりを持つことにより、実際に有効な連携が取れる。児童生徒への指導は学校だけではできない。
- ・ 学校に関係する様々な立場の人や機関が、それぞれの役割を十分に認識し、その役割をさらに広げ、深めていく

中で学校と関わっていくという連携の在り方が、学校の教育課題解決に向けた大きな推進力になる。

○ 綿引 雄一 氏

- ・ 不登校対策についてお話ししたい。学校現場、また、適応指導教室での指導経験から、数多くの不登校の子どもに接し、多くの保護者の不安や悩みを聞いてきた。行政機関を含め、それぞれに取組が行われているものの、なかなか状況は改善していない。積極的な対策を講じる必要がある。
- ・ 石巻地域の小中学校での不登校の実態は、5月の調査では小学校で20名以上、中学校で120名以上があり、うち一日も登校しなかった中学生が70名近くいる。今年は、昨年度よりも早いペースで増えている。中学校が特に増加傾向にある。  
学びの場や体験の場から遠ざかっている子どもたちがこんなにもいるのだ。
- ・ 行政及び各学校で、現在行われている不登校対策としては、県教委が行っているスクールカウンセラーの配置、不登校相談センターでの相談及び指導、生徒指導に関する教員の研修、教育事務所における専門家による相談活動などである。石巻市教育委員会では、不登校対応協議会等を開催して教員の研修に努めたり、適応指導教室を設置し、不登校生徒の指導に当たっている。各学校では、主として担任が家庭訪問をしているが、週1回から次第にその数が減っていく傾向がある。担任がどう対応して良いか分からない、保護者との信頼関係が築けない、面会を断られてなすすべがない、という状況も見られる。部活が終わってから夜に学習指導をしている学校もあるが、教員の負担が大きすぎ、続かない。保健室や別室登校の例もあるが、学校では、その場で指導する余裕がないのが現状である。生徒指導委員会等で組織的に対応策を検討している学校もあるし、スクールカウンセラーも一定の成果は上げている。しかしながら、不登校は一向に減っていないし、状況の改善も見られていない。
- ・ 学校と相談機関との連携がスムーズにいかないことがある。学校は、相談機関に照会するのに慎重になる。学校は、責任を感じ、自分たちの働きかけで何とかしたい、と考える。特に、対人関係のトラブルを他の機関に委ねることが、責任回避と捉えられないか、と考えてしまう。こうして不登校状態が長引く。
- ・ 不登校生徒の状態を適切に見立て、学校や家庭に積極的、能動的に働きかけ、不登校問題の改善を進める機関が必要である。
- ・ 石巻市けやき教室では、不安や悩みを抱える子ども達が「安心していられる場所」を提供し、個々に応じた生活指導、学習指導、適応指導、体験活動を行いながら学校復帰を目指している。通所してくる子どもの指導だけでなく、「けやき教室ガイド」を各学校に配布し、保護者の子育て相談に応じたり、講演会を開いたりして、不登校支援センター的役割を担おうと思っているが、限界があることを痛感している。相談活動に力を入れても、これ以上の改善を見込むことは難しい。自ら相談に来ない人もいり、具体的な指導や支援を受けられなければ保護者も諦めてしまう傾向がある。
- ・ 積極的な不登校対策のため、県内数地域に不登校支援センターの設置を望む。常勤する職員として、直接生徒の指導に当たる指導員、相談に当たるカウンセラー、家庭訪問指導員がいると良い。これに、遊びなどを手伝うボランティア学生、協力してくれる医師が加わるとさらに良い。このような不登校支援センターが、行政機関や学校と連携し、不登校児童生徒の実態を把握し、学校や保護者及び本人に積極的に働きかけ、不登校センターへ通わせたり、家庭へ支援したりして学校復帰の手助けをする。
- ・ 再登校の際にも、サポートチームを作って援助をする。このセンターが中心となり、関係機関のネットワークも作ることができる。
- ・ 最初のイメージとしては、適応指導教室に、相談機能と学校への支援、学校訪問機能を付け加えたもの、と考えても良い。
- ・ 先日、秋田県と北秋田市教育委員会では、不登校児童生徒支援のための宿泊研修施設を作り、常駐する職員を置いた。宮城県でも参考とし、前向きな不登校対策を実施すべきであると考えます。
- ・ 今のところ、不登校児童生徒を実際に指導する施設としては、適応指導教室がこの役割を担っている。各適応指導教室の充実について県として支援をして欲しい。不登校支援センターの構想も、県独自でなくとも、適応指導教室を設置している教育委員会との連携を図ることにより、費用の問題が緩和されたり、より具体的な対策が展開されると考えている。

○ 阿部 美幸 氏

- ・ 地域の普通校に通っている子どもはたくさんいるが、障害者が多くなっているのか、養護学校に入学する子どもが増えている。少し障害を持っていて、学力的には落ちていても普通に生活できる、という子どもが、中学校を出た時に、養護学校高等部に通うことが多くなっている。入学すると、「修学旅行は先生に迷惑をかけるから行かせ

なかった。」「学校に迷惑をかけるからプールには1回も入れなかった。」という保護者が多い。先生のケアが足りないのではない。保護者側が引け目を感じ、遠慮しているのが残念に思う。

- ・ 中学校卒業で就職は今なかなか難しい。進学はもっと難しい。
- ・ 高等部で作業などいろいろなことを覚えて、能力を伸ばし、就職活動している人もたくさんいるし、普通の就職は難しいので、通所施設等に職場を探す人も多い。しかし、通所施設は、年々いっぱいになってきている。うちの子はうちに置いてても困らない、と在宅を選択する家庭もかなりある。通所施設の負担金については改善されてきている、どこにも行くところがない、と言う状態は、これからも続くであろう。
- ・ 就職の受け入れ態勢は、今から作っていかないと、家で親といるだけということになってしまう。行きたくなくても無理してでも行き、家に帰ってホッとするというのが普通の良い生活だと思う。一日家でテレビを見て過ごすのは良いことだとは思わない。
- ・ 石巻養護学校では、各地元に帰って生活するという取り組みをしている。本来通うべき小学校に行き、1日か2日過ごす。クラスの子ども達は、障害者として見るよりは、「少しできない珍しい子がいるから世話してあげなくては。」と受け止め、他の子ども達にも刺激があつて良いと先生達から聞いている。
- ・ 障害を持つ子が通いやすく、地元に戻っても生活しやすい環境というのは、言うのは簡単だが実際には難しい。
- ・ 普通の中学校を卒業した時に進路として養護学校を選ぶ子がたくさんいるが、中学校の先生は、この子は将来的に養護学校であろう、というのは分かると思うが、養護学校の先生に来てもらって話を聞くとか、逆に養護学校に行つて先生達が勉強するというのも必要だと思うので、そのような機会を増やして欲しい。
- ・ 普通中学校に行っている子でも、養護学校で先生と相談して、どういうことをしたらその子の能力がもっと上がるのか、情報交換をもっとしていただければ良いと思う。あと3年早く養護学校に入っていれば、この子はもっと伸びただろうと思うことがある。普通学校に通う障害を持つ子どものサポートに、これからも取り組んでいただきたい。
- ・ 宮城県沖地震が心配されているが、自閉症の子どもは、いざという時に、少しのことでもパニックになってしまうので、騒いだりして周りに迷惑をかけることを親が気にして、災害現場で孤立してしまう。親の住む地域ごとに、災害時に子どもと連絡が取れるようにし、このような親をサポートしてはどうか、と思い、体制づくりに取り組んでみている。しかし、親の居場所が広域に亘っているため、難しい問題があり、とりあえず、養護学校を避難場所として開放してもらえるよう校長先生にお願いしている。養護学校が石巻市と東松島市にまたがっていることもあり、支援の状況がよくわからないままに始めてしまったが、他の被災地の人はどうしているのかな、と思う。自閉症の人はこだわりが強く、親でも対応はなかなか大変である。緊急時に備え、これからも皆でサポートして欲しい。

#### ○ 太田 宗史 氏

- ・ 日本における宮城の位置づけを考えてみると、宮城は、昔から米を中心とした農業、日本でも有数の漁港を持つ水産業・加工業、その他の製造業がさかんで、ものづくり大国であると言える。
- ・ 物を作ったり魚を採ったりして、日本中に供給し続けることが、食糧危機が叫ばれる中、宮城の重要な役割である。この役割を未来永劫果たし続けるため、これを担う人材を育成し続けることが、今後10年に亘る教育振興基本計画の根幹となるべきことである。
- ・ 社会性に富み、コミュニケーション能力を有する人材を育成するため、人間力の醸成に力を入れるべきである。現代は、人と直接会わなくても、ゲームや携帯などを使って家で一人で楽しく過ごせるようになってしまい、人と会話する時間が昔に比べて激減している。昨今の少年を含む犯罪をみると、これらに起因すると思われる事犯が多くある。
- ・ このようなことを防ぐため、幼児期に近い時期の教育が特に重要である。
- ・ 集団スポーツに力を入れるべきである。スポーツ少年団がうまく機能している地域は良いが、実施できない地域もあるようだ。小学校でもスポーツ少年団への参加を促すなど、スポーツ少年団活動が教育の一環であることを明確にし、学校も積極的に関与して、何とか実施できるよう方策を考えるべきである。まずは、先生方に各スポーツ少年団の練習などを見学し、どんな指導を受けているのか、知っていただきたい。また、指導者への報酬等も考えるべきである。
- ・ そのために、地域、親の協力が不可欠である。PTA活動を活性化させ、今以上に授業参観、文化祭、運動会等の学校行事への参加を要請し、学校が中心となり、スポ少、PTAを巻き込んだ教育の展開が必要である。
- ・ 一方で、モンスターペアレントと呼ばれる親や、給食費を払えるのに払わない親など、社会性、人間力の乏しい大人も増えている。このような人達の対応を教師に押しつけるのは酷であるので、条例等法的な手段でも排除するしくみ、警察の手助け等も必要である。人材教育の一番の阻害要因であると考え、先生達に教育に専念できる

環境を提供するべきである。

- ・ もちろんスポーツオンリーではだめである。詰め込みと言われようが、小中学校では基礎学力向上にも力を入れるべきである。習うこと、覚えたこと全てが目標とするものづくりに必要か、といえば、そうではないケースもあると思うが、我慢強く「やるべき事、やらなければならない事をしっかりやらねばならない」という基本的精神の醸成に確実に繋がる。この精神は何をやるにも絶対に必要不可欠である。忍耐強さを少年期に身に付けさせるとともに、学んだ内容は常識、知識として大人になっても「確かな学力」として残るはずである。
- ・ 変な平等主義、差をつけない教育が行われていることが気になる。無理に差別化する必要はないが、個々人の違いを認識し、多少の挫折感は少しずつ与えていく必要がある。こういうことに慣れていないと長い人生で必ずぶつかる大きな壁や挫折を味わった時に、自殺や犯罪という行為に出してしまうのだと思う。小さくても、世の中では絶対排除できない個人ごとの差を少しずつでも味わえる、感じられる施策も必要である。
- ・ 高校教育について特に思うのは、ものづくり人材の育成のため、専門高校では、その道の専門技量、職業観を集中的に教育することが重要であるということである。宮城県、ひいては日本の農業、水産業・加工業、製造業を担う人材を育てるため、実際にその業に従事する農協、漁協、工場等と連携を図り、より実際の授業を行うこと、時代の流れにマッチしたカリキュラム作りが重要になってくる。我が社において、専門高校生を採用して一番ありがたいのは、職業観、働くということを身に付けてくれていることである。ものづくりの楽しさ、喜び、作業衣を汚しても完成させた時の達成感などを経験し、基本的なあいさつ、みだしなみ等を身に付けた人材は非常にありがたく、入社後も工場の中核として活躍している。
- ・ 現在、我が社においては、石巻工業高校と連携し、カリキュラム作り、授業に協力している。互いにとってWIN-WINの関係になり、地域の人材育成に繋がれば、と考えている。
- ・ 農業、水産業、製造業を担う人材に必要なものは何か、現場の声を聞き、教育内容の充実を図るべきである。
- ・ 専門高校の授業風景を、小中学校の保護者や教師に見学させてほしい。小中学校の先生は、学校の中の社会しか知らないところがある。当社と石巻工業高校との連携でも、互いに見学からスタートし、理解を深めてから連携について考えていった。「百聞は一見にしかず」である。

#### ○ 佐々木 松子 氏

- ・ 我が家では、帰って来れば皆が台所に集まり、にぎやかに話をしながら夕食の準備をする。「ただいま。今日のメニューは？」が帰宅時の決まり文句である。食卓で「これは誰の作品です。」と紹介するため、子どもが小さい頃には紹介されたい一心で一生懸命手伝ったものだ。お互いにおいしい食事をして「ありがとう」が気持ちよく言えるように仕事をしようと約束している。
- ・ 社会の一番小さな単位である“家庭”では、生きる原点あるいは生きる糧なるものが食事であり、「今日のメニューは？」のセリフは“人が人らしく生きている心の証”かもしれないと感じ、皆がおいしそうに食事をする顔を想像しながら作っている。
- ・ 「子どもは腹いっぱいにしていけば悪いことはしない」と祖母が母に言っていたことを思い出す。“食足りて礼節を知る”とはまさにこのことかな、と自分なりに理解している。
- ・ 物が豊かになり、文化的にも教育的にも経済的にも恵まれている昨今、若者が引き起こす殺伐とした事件が何と多いことだろう。一体何が足りないのだろうか。現代では“食足りて”は満腹になることではなく、複雑な社会のストレスや心身ともに満たされない何かがあるのではないか。
- ・ 子育てや、社会教育指導員、教員補助員、心の教室相談員としての経験を通して現代の子どもや若者の姿が次のようであると感じている。
  - ①親の愛情が足りない（スキンシップが足りない）
  - ②自分に自信がないと感じている
  - ③存在感がないと感じている
  - ④想像力がない
  - ⑤その他：勝ち組、負け組、格差など
- ・ このような子どもや若者の姿から、家庭、学校、地域のあるべき姿を考えてみた。

##### ①家庭のあるべき姿

家庭は、学校や地域など様々なストレスから解放され、心身ともに安らげる場所である。「ただいま」と学校から帰ったら「お帰り」と母親が迎え、母親の手作りの料理を食べさせて欲しい。子ども達はお母さんの笑顔と手作りのごちそうで心が元気になる。自分が愛されている、大事にされていると感じ、そのことが学校や地域社会で生活する糧になっている。そうするだけで、意地悪をしたり、迷惑を掛けて人を困らせる子が随分少なくなるはずであ

る。

## ②地域のあるべき姿

地域は、様々な年代の人の中で、家庭や学校で学んだことを実践できる身近な社会である。お祭り、運動会などの行事に参加することで、地域の人達の寛容な心に支えられ、心身共に育つ場であり、自分を認めてもらう身近な社会である。子どもも大人も皆忙しく、なかなか触れ合う場や機会が少ないが、“地域で育てる”をスローガンに各地で様々な取組がされている。

地域のことを調べたり探検したりして、学校の宿題や夏休みの自由研究を子ども会のメンバーや地域の人達の協力を得て行うなど、地域の人達ともっと親しくなれる機会を作るよう、学校の先生とも協力して取り組んでいきたい。

## ③学校のあるべき姿

将来を担う子ども達に勉強を教えることが学校の一番大切な役割であるが、人が人らしく生きるための人づくりをする機関でもあり、きちんと働き税金を納めて日本の国を支える一員になるための教育をする場でもある。集団の中で子ども達が競い合い切磋琢磨して自分を見だし、知るところである。また、個性を認め合う場でもある。先生の指導を仰ぎながら、同年代の子どもや先輩、後輩と同じ目的や目標を持ち、それを達成するためには心を一つにして規則を守らなければならないということを学ぶ場でもある。

教員補助員や心の教室相談員の経験を通じ、リーダー的存在で学業優秀と思われる子が、自分に自信がなく、不安を持っていることに気づいた。先生や親に言われたから、皆がやるから、という理由で、自分の意思でなく勉強しているため、満足感や充実感がなく、自信もない。ゆっくり考えたり、繰り返しやる時間がないのだろうか。

教科については、豊かな心や寛容な心を育てるために、音楽、図画工作が重要な教科であり、もっと重点的に行って欲しい。また、技術家庭科は、生活するための術を知り、生きていく事への安心感を持たせる教科である。

また、進路指導を重視し、特に中学校の先生には、子ども達の適性や隠れた能力を引き出す教育をしてほしい。

親や家庭教育が子育ての基盤であるので、家庭教育がきちんとなされるべきであるが、安心して子育てができるよう、学校や地域の方々に協力いただき、さらには将来を担う子ども達のために行政や企業にも思い切った発想の転換をしていただき、これからの日本のために素晴らしいシステムを構築していただきたいと望む。

## <意見交換>テーマ 「生きる力」を育てるために ～学校・家庭・地域社会の役割は何か～

### ○ 安住 教育企画室長

貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。

本日、5名の皆様からは、不登校問題について、障害を持つ子どもの教育について、子どもの時の育て方、産業人材育成について、学校・家庭・地域社会の役割など、幅広く発表いただいた。それぞれに教育の対象者は異なっているが、地域で子どもを育てていくに当たって、学校・家庭・地域がそれぞれどのような役割を担っていけばよいのかということに絞って、発表いただいたことの範囲に限らなくても良いので、皆様から御意見をいただきたい。

### ○ 綿引 雄一 氏

- ・ 「はやね・はやおき・あさごはん」のスローガンは、子どもの学びの基礎力を養うものだと思っている。
- ・ 行政が関わる「生きる力」の中では、学力は大事である。しかし、学校現場が学力向上だけにシフトしてしまうのではなく、豊かな人間性を育てることを重視しなくてはならない。学校不応や思春期を迎える子ども達と多く接していると、社会性と自立心を育てていくことが大事であると感じる。それには、家庭、地域の役割が大きい。しかし、学校の中でも、社会性の育成、自立心の育成をもっと重視すべきである。義務教育9年間で、将来に夢を馳せる健全な子ども達を育てることが必要である。
- ・ 小学校と中学校の教育の実際について、互いの教員がどれ程知っているのか、疑問である。小中教員の人事交流も大事だが、小学校の教員が1ヶ月くらい中学校に行って思春期の子ども達の生徒指導、進路指導の実際を見ることが出来る研修、反対に、中学校の教員が小学校でどういう教育が行われていることを見る研修等が必要ではないか。
- ・ 幼児教育の段階から、遊びや集団活動の中で、対人関係を学ばせ、がまん強さや目標に向かって立ち向かっていく力を育てることが大事である。
- ・ 地域の教育力向上のため、子ども会の再生を提言したい。子どもを通して親同士が関わり、互いに子どもを育て

ようという意識を育てなければならない。親が人付き合いするのが面倒なので、お金で解決するような子どもの遊ばせ方では子どもの社会性は育たない。

○ 菱沼 伸一 氏

- ・ 心の教育や体力に関する教育が少し置き去りにされていると感じる。小学校からの育ちの継続が、心の教育にとって非常に重要である。小学校、中学校の指導の独自性も大事だが、一貫性も大事である。
- ・ 必ずしも、地域や家庭の教育力が落ちているとは思わない。学校側が、これらを知らないだけなのかもしれない。学校がまずは、地域や家庭の教育力を見出そうと努め、それらを生かしていく、その中からもっともっと見えてくるものがあるはずである。
- ・ 食育、キャリア教育、職業教育、進路指導など、いろいろな対応が学校には出てきているが、限界になってきているのではないか。家庭・地域との役割分担は重要である。その意味でも、学校はもっと外へ出て行き、地域や家庭の協力を見直し、協力をお願いし、子ども達を見守っていく体制を作らなければならない。

○ 阿部 美幸 氏

- ・ 障害を持つ子ども達が地域に戻って生活するためには、子ども会が重要である。親が忙しいという問題があり、参加が少なくなっているが、1、2か月に1回くらいなら、機会が取れるのではないかなと思う。そういうところに障害を持つ地元の子どもを参加させると良いと思う。小さい時から障害を持つ子に接していると、優しい気持ちを持ち、感受性が豊かになる。集団で生活しないことには、人の痛みも分からない。
- ・ 障害者のいる家庭の子どもは、手助けをしようという優しい気持ちが自然と芽生える。
- ・ 障害者に限らず、高齢の方も多いため、優しい気持ちを育てることは大事である。
- ・ 最近の運動会のかけっこでは、順位を付けないという話をよく聞くが、上に上げられる喜びを味わうことも重要ではないか。去年は2位だったけど、今年は1位だった、小学校の時はビリばかりでも、大きくなった時にこれだけできるようになったなどという話にも繋がっていく。
- ・ 年代の違う子ども達が交流することも、優しい気持ちを持ったり、いじめをなくし、不登校を改善するために必要なことである。そのために、小中学校の先生がお互いにつながりを持ち、コミュニケーションを取ることが大事である。

○ 太田 宗史 氏

- ・ 子ども達に生きる力をつけるためには、先生方が見聞を広め、社会性を身に付けることが必要である。我が社で、高校の先生方の見学を受け入れたところ、ほとんどの先生方が名刺を持ってこなかったことなどに、民間との大きなギャップを感じた。民間の付き合いでは、名刺を持ってこない人の会社とは、二度と取引をしない、ということになりかねない。

○ 佐々木 松子 氏

- ・ 平成7年頃、中学校のPTA会長を経験した時、先生と保護者が仲良く協力し合うと、子ども達の成績が自然に伸びたり、子ども達同士の仲が良くなったり、PTA活動が活発になったりするということを強く感じた。地域においても同じで、子ども達は、知り合いが多いと、見られているという感覚から悪いことはできず、素直で一生懸命になる。保護者と先生と地域の人々の連携がうまくいけば、「地域で育てる」ということも、軌道に乗るのでは、と考えている。学校や年齢の垣根を越えて交流、活動するための一つの方法では、と思い、自由研究を子ども会でやるということを提案した。
- ・ しかし、実際には、三軒くらい隣に住むのおじいちゃんの顔も子どもが知らず、歩いている子どもに声をかけたところ、不審者と間違えて学校に連絡され、学校からの不審者情報のお便りを見て、そのおじいちゃんが学校に申し出た、ということがあった。あいさつ運動をするなどして、子どもが近所の人と知り合いになる努力を大人がしていかなければならない。
- ・ 子どもの前で親が先生の悪口を言うことは絶対にしてはいけない。悪口を言っていた親の子どもや、言われた子どもが、いじめの対象になることもある。子どものために、大人同士のコミュニケーションをうまくできるよう努力していかなければならないと感じている。

○ 高橋 高校教育課長

- ・ 貴重な御意見をたくさんいただき、大変感謝している。



- ・ 特に太田さんには、石巻工業高校の実習や、教員の研修受け入れなどに多大な御支援をいただき、この場を借りてお礼申し上げる。
- ・ 大人同士のコミュニケーションが極めて重要であるという佐々木さんの御意見には、全く同感である。学校の教員同士、また、教員が気づかない部分は、保護者の皆さん、地域の皆さんに教えていただきながら、力を合わせて同じ生徒を伸ばしていかなければならないと改めて実感した。
- ・ 専門高校において、時代の変化に対応した、最新の知識・技能の面で、企業には勝てない部分があるので、企業に研修、実習を受け入れていただくことが大変重要である。また、菱沼先生のご発言のとおり、学校の限界という状況も高校においても間違いなくあり、学校だけではカバーしきれない部分を、地域の皆さん、保護者である家庭の皆さんと手を携えて行っていかなければならないと強く感じている。
- ・ その第一歩として、まずは、情報の共有をしていきたいと考えており、高校の情報を様々な形で発信している。各学校にも情報発信を促しているが、高校教育課としても、高校ガイドブックを作成したり、一日体験入学の情報をホームページにも掲載するなどしている。今後とも情報発信に力を入れていきたい。
- ・ 本日の御意見を生かし、高校教育関連施策や事業の改善に努めていきたい。

#### ○ 安井 教職員課長

- ・ 小中学校の連携を、一つの大きなテーマとして御意見いただいた。学校の連携を促すための支援のあり方は様々あると思うが、県としては、教員ができるだけいろいろな校種を経験し、幅を広げていくことが、教員のキャリアアップにもつながり、子ども達の教育の充実にもつながっていくと考え、校種を超えた人事交流を積極的に実施していきたいと考えている。
- ・ 義務教育段階だけでなく、高校も含めた人事交流も管理職や教員について現在進めている。
- ・ また、教員の研修を行う際に、異なる校種の教員が共に議論できるようにバックアップしたり、学校での研修の際に、できるだけ地域の異なる校種の教員にも参加してもらい、子どもの指導のあり方を考えるように促しており、このようなことを通じ、教員のネットワークを広げることににより、日常の教育活動における情報交換もスムーズに行えるようになる。
- ・ 特別支援学校の教育のあり方について、教員の専門性に強い期待を寄せられていることを感じた。全ての学校で、支援を受けられる体制を作っていこうとしている。特別支援教育センターという専門の機関において、教員の研修や、学校、保護者からの相談に応じられる体制を作っている。各地の特別支援学校が普通学校を専門的に支援する体制づくりについても進めている。どのような学校に学んでも、サポートができる体制を目指している。
- ・ 高校教員の企業での研修受け入れについて、感謝申し上げるとともに、いろいろとご迷惑をかけていることに対して、お詫び申し上げたい。

#### ○ 後藤 生涯学習課長

- ・ 今日、非常に参考になる意見が多かった。
- ・ 小学校、中学校の連携、高校、就職先へのつながり、という話があった。生涯学習的視点から、自分たちが人生を生きていく上で、どう生まれ、どう死んでいくのか、自分たちの人生がどう構成され、どう人間として成功していこうとするのか、といった人生のトータル設計のイメージを持っていただく必要があるのでは、と考えている。それらを踏まえて、行政としてどのような生涯学習制度、サービスを提供していけるのか、という考え方を取っていききたい。
- ・ 自分の人生のイメージを抱かせてくれる大人が地域の身近なところにいるということを子ども達に気づかせてあげたい。各地でもそのような取組を是非行っていただきたい。
- ・ その前提として、私の個人的な見解もあるが、自己肯定力が必要だと思っている。地域、家庭の教育力が落ちていられると言われるが、全てがだめな訳ではない。地域教育、家庭教育が抱える課題は課題として、解決の方向を望みながら、まだまだ肯定的に捉えるべき部分は多いので、それらを積極的に捉え、子ども達が、自分たちは恵まれた環境で生きていけるのだ、ということが分かるような条件づくりをしていく必要があると考えている。会社にしても、積極的に就職することによって自分の人生が開けていけるんだ、というふうに、肯定的イメージを持ってもらうことが必要である。
- ・ これらを取組として各地域で具体化するのが協働教育である。既に地域にある社会教育資源を有効に協働教育のテーマの中で結びつけながら、学校・地域・家庭が連携して子ども達を育てていけるような雰囲気が出来ていくことが必要ではないか。
- ・ 今後ともさらに御意見をいただきたい。

### <傍聴者からの意見要旨>

- ・ 「どんなに重い障害があっても、地域の学校で学べる」という、平成17年に策定された宮城の障害児教育将来構想の理念に通じるものが、国の計画には見あたらなかった。県の計画には、是非盛り込んでいただきたい。
- ・ 今日のテーマ「生きる力」については、私の子どもが障害を持っていても、ずっと地域の学校で育った結果、ほぼ自立をして生活できている状況を見ると、地域で「共に学ぶ」教育は必要だ。お互いの違いを認めていくことに、教育の根本なねらいがあり、どの子にとっても自立につながると実感している。

### (3) 仙南地区

日時：平成20年7月13日（日）10:00～12:00

場所：村田町中央公民館1階大ホール（村田町大字村田字西田28）

出席者：	教 育 長	小林 伸 一	意見発表者：	柴田町立東船岡小学校
	教育企画室長	安住 順 一		教 諭 綱 川 誠 氏
	教 職 員 課			柴田町立船岡中学校
	県立学校人事専門監	中川西 剛		教 頭 永 山 晋 氏
	義務教育課			子どもの杜エール
	副 参 事	本 明 陽 一		代 表 櫻 井 美 砂 子 氏
	高校教育課長	高 橋 仁		特定非営利活動法人仙南広域工業会
	生涯学習課長	後 藤 康 宏		常務理事 工 藤 忠 雄 氏
	大河原教育事務所長	倉 田 栄 喜		大河原管内スポーツ少年団連絡協議会
				会 長 村 上 利 仁 氏

#### <意見発表要旨>

##### ○ 綱川 誠 氏

- ・ 私が勤務する柴田町立東船岡小学校は、宮城県内で唯一「コミュニティ・スクール」の指定を受けている学校である。平成17、18年度は文部科学省の指定を受けて研究を進め、平成19年度4月に柴田町教育委員会からコミュニティ・スクールとして指定された。
- ・ PTA役員、行政区長、大学教授などから成る学校運営協議会を「新しい学校を創る集い」の名で組織している。毎年度末、評価指標に対する達成状況を検証している。
- ・ 今年度は、4月に本校の実態に合わせた49の評価指標を設定し、学校便りで保護者にも知らせた。
- ・ 開かれた信頼される学校づくりには、学校や教師の自己評価のみならず、家庭や地域の方々の率直な意見を絶えず聴き、改善していく取組が大切だと考える。
- ・ 保護者や地域の方々が学校教育の参画意識を高め、学習支援ボランティアなどによる支援を充実させるなど、校長の教育理念とリーダーシップに基づく学校運営を応援していただくコミュニティ・スクールの充実を今後も図っていかうと考えている。
- ・ コミュニティ・スクールの研究を進める上で、他県のコミュニティ・スクールに勤務する教員と情報交換を行うようになり、地域の実情に合わせたコミュニティ・スクールの確立を目指して各学校とも努力しているのが分かった。
- ・ 私は、次のような特徴を持つ「宮城型コミュニティ・スクール」を広げていくことを提案したい。
  - ①「学校」は、教育活動の目標を明確にする「目標達成型の学校経営」を進める。教師と子ども、家庭が目標を共有し、一体となって取り組むために、「学校マニフェスト」を作成する。
  - ②「学校」は、絶えず学校だよりやホームページなどで情報を公開する。
  - ③「学校」は、保護者や地域の方々の率直な意見を絶えず聞き、教育活動の質的向上を図る。
  - ④「家庭」は、基本的な生活習慣や学習習慣を身に付ける取組や、将来について語り合うことなど、親と子どもが正面から向き合うことを大切にする。
  - ⑤「地域」は、子どもを褒めたり、叱ったりできる地域づくりや、地域の専門家が、学校の授業や活動に積極的に協力する地域づくりを目指す。
- ・ 「子どもの学び、子どもの成長を学校・家庭・地域が一体となって支えるシステム」として、コミュニティ・スクールが宮城県内で多く誕生することを願っている。

##### ○ 永山 晋 氏

- ・ 私の勤務する柴田町立船岡中学校では、教育基本法及び学校教育法の改正、学習指導要領の改訂を受け、「豊かな品性、強い心身、確かな知性を備えた生徒の育成」を教育目標とし、「心の教育の充実」を第一に、教育目標の具現化に努めている。
- ・ 教育実践の中で最も大切にしていることは、日々「一人一人の生徒の心に寄り添う指導」に努めることである。教育とは、人が人を育てる営みであり、その基盤は人と人との信頼関係である。生徒一人一人が教師を信頼し、心を開くことが最大の教育効果を産む源である。

- ・ 子どもたちが分かる授業，楽しい授業を通じ，子どもたちを惹き付け，知的欲求を喚起し，科学的な思考を揺さぶり，結果として生きた知識として学力が定着していく。心の教育の核となる道徳の時間についても同様である。
- ・ 自分にとって，よりよい学習の機会を提供してくれる教師，そして，人間として，大人として，人としての生き方の見本を示してくれる教師が子ども達一人一人としっかりと関わることが教育の最も大切な部分であるとする。
- ・ これらを実現しにくくしている教育現場の課題が2つあると考える。

①教員が生徒と向き合う十分な時間を確保することが困難

- ・ 勤務時間の超過が小・中・高全てで見られ，中学校は特に顕著
- ・ 毎日の授業の教材研究，評価，指導法の工夫改善，学校生活に適應させるための生徒指導，友達関係や家庭環境などに起因する精神的に不安定な生徒への個別的な支援，不登校の生徒やその家庭に対する支援のために放課後や夜遅くに家庭訪問をする必要性など。
- ・ 県，国からの少人数加配，町からの特別支援補助員の配置によって現場はとても助かっている。さらなる支援を望む。

②「家庭との連携」の難しさ

- ・ 学校，家庭，地域が互いの役割を理解し，その機能を発揮することにより「知・徳・体」のバランスの取れた成長が図られる。
- ・ 学校がこの協働を主導していくべきと考えるが，趣旨を理解し，協働の場を意識する家庭が実際には少ななっている。授業参観後の学年PTAの参加率は3割程度。生徒指導上の問題を抱える生徒への指導のため，保護者と連携が必要だが，意図がうまく理解されなかったり，連絡すらつかないことがある。
- ・ 学校としても，連携の中心としての役割が果たせるよう情報発信や相互理解に努めていくが，保護者同士が連携や協働の大切さを啓発し合う関係づくりに努めたり，地域や行政からの個々の家庭への積極的な支援等がなされたりするような意識や体制づくりも必要だと考える。

○ 櫻井 美砂子 氏

①保護者の就労と子育ての両立について

- ・ 女性の就労が当たり前となり，親が忙しすぎて子どもにしっかり目を向けて子育てしていないこと，親自身の生活を優先させていることによって，子どもに朝食を与えない親，朝起きない親が増えている。
- ・ 非正規雇用者や，中小企業に勤める人にとって，子どものことで何日も職場を休むことは難しい。
- ・ このような現状を踏まえ，私達の団体「子どもの杜エール」では，病後児の一時預かりや，学童クラブの時間外の児童一時預かりを始めた。
- ・ しかし，保護者の就労支援にはなっても，親を子どもから益々引き離すことにもなり，良いことだとは思っていない。子育てしながら働きやすい職場環境を構築することが不可欠である。
- ・ 一人で企業へ働きかけても効果はない。また，大企業は，既に子育て支援対策に取り組んでいるところも多いので，中小企業に対し，各市町村からの支援や働きかけがあると，地域全体の機運を高めやすく，有効だと思う。
- ・ 健全な子ども達の育成には，「はやね・はやおき・あさごはん」といった基本的な生活習慣を身に付けることが大事である。一日のスタートから元気に，意欲を持って物事に集中して取り組むことができる。親の意識改善にも繋がる。親の関わりも大切である。

②放課後子どもプランについて

- ・ 厚生労働省と文部科学省が共同で行っている取組だが，町レベルでは，それぞれが同じ目的で事業を展開しており，連携が取れていないように感じる。
- ・ 学校の空き教室や児童館という建物に子ども達を囲ったから安全ということはない。子どもが一人で，または友達と地域の中を歩くことができるよう，地域全体を安全なものにしていく必要がある。
- ・ 児童数が少なくなった小学校の運動会は，地域の運動会とし，地域のお年寄りから子どものいない家庭も顔を合わせる場としていくなど，地域住民が集う機会を増やしていくことに取り組んでいきたいものだ。地域の中で出会った子ども達と気軽に声を掛け合える関係であることは大事である。
- ・ 健全な子どもの育成のために，これまで行ってきた事業が本当に必要なのか，必要でないことは見直していく勇気も大事である。

○ 工藤 忠雄 氏

- ・ 仙南広域工業会は，10年前に発足し，今年度NPO法人となった。仙南地域の「ものづくり」に携わる製造業

を中心に、地域産業界が一体となって人材の確保、人材育成、技術の高度化を図り、地域経済の活性化と発展、雇用環境の向上を目的とした活動を行っている。

- ・ ものづくりは、人づくりである。「元気がある企業」とは、社員が明るく元気よく、働きがいがあるということ。このような環境をつくるためには、人材の資質やスキルを高めるための人材育成教育がなされており、技術や技能を有する人材が育っていることが必要である。
- ・ 指導者にとって人材が育った時の感動や達成感は格別なものであり、その積み重ねが技術や技能の発展に繋がっていく。学校、企業、行政が一体となった「ものづくりの教育環境」を創ることが重要である。
- ・ 子ども達が「ものをつくる楽しさや技術の大切さを学んでもらえる“場づくり”」と、先生方のレベル向上を図る“場づくり”として「ものづくりの実技訓練や実践教育」を行っていただき、習得したものを子ども達に指導していただきたい。
- ・ 地域で育てた子ども達が地域の企業に就職し、地元企業の元気の源を創ることが出来るようになれば望ましい姿である。
- ・ 企業がものづくり人材教育の一環として、学校と連携を図り、実技訓練やインターンシップを行っていくという動きもあるので、以上のことが教育振興基本計画に反映されることを切望する。
- ・ 仙南地域の企業が元気よく、町が明るくなるよう、今後も支援していきたい。

#### ○ 村上 利仁 氏

- ・ 大河原管内スポーツ少年団は、七ヶ宿町を除く2市6町が本部を結成しており、合計145団、2,715名が加入している。指導者は620名で増加傾向にある。小中学校合わせた在籍児童数に対し、18パーセントが加盟している。30パーセントにも満たないのはさびしいと感じている。種目は、多い順に野球、空手、バレーボール、剣道、柔道、サッカーである。町ごとに特徴のある種目や町の姿勢を生かすような種目、県全体で見ても珍しい種目もある。
- ・ スポーツ少年団で子ども達が守るべき事は次のように定めている。
  - 一、 スポーツを通して健康な体と心を養う
  - 一、 ルールを守り、他人に迷惑をかけない、立派な人間になる
  - 一、 スポーツによって、自分の力を伸ばす
  - 一、 スポーツの喜びを学び、友情と協力を大切にす
  - 一、 スポーツを通して世界中の友達と力を合わせ、平和な世界をつくる
- ・ 少年団の活動は、大会や練習に明け暮れる種目で活動しているところもあれば、季節毎に別のメニューで体づくりを行っているところもあり、また、地域に貢献できるボランティア活動を盛んに行っているところもある。
- ・ 各団とも、「青少年の健全育成」を主眼とし、指導者は父兄の協力を得ながら子ども達に直接声をかけ、精神面、技術的な面を育ててきた。地域の子どもの成長を見るのは、親でなくとも嬉しいものだ。
- ・ 学力、体力の低下、不登校、いじめ、校内暴力などが全国的な問題となる中、家庭・地域・学校がそれぞれの教育機能を果たしながら協働して教育活動を展開することが不可欠である。
- ・ スポーツ少年団の役割として、身体の健康増進、心の健康増進、知的適応能力、社会的適応力、情操豊かに、基本的生活のルール、挨拶や友達との関わり（コミュニケーション能力）、基礎体力と持続力（根気）を育てることを認識している。
- ・ このようなことから、県が進めている「はやね・はやおき・あさごはん」を地域全体で盛り上げていくことこそが大切である。
- ・ 指導者には、子どもの成長過程の中で、自らの体を動かせる、全身を巧みに動かせる、体の個々の動きをコントロールできるようになる大事な時期であるので、種目の技術にこだわらず、様々な遊びを取り入れていくことが必要である。スポーツ少年団で活動してきたことを一生忘れることのないように心がけ、指導者は子ども達に接してほしい。
- ・ 21世紀になり、科学技術の発展や生活の利便化により、日常生活における身体活動がますます減少していくことを考えると、個人が主体的にスポーツに取り組むことは極めて重要である。
- ・ 子ども達に指導するときには、子ども達との信頼関係が大切である。指導者に最初に心がけて欲しいのは、子ども達にスポーツを大好きになってもらうこと。次に、スポーツは面白いということを身をもって指導してほしい。
- ・ そうすることにより、子ども達は、一生懸命少年団活動を楽しんで行い、これらの積み上げによって少年団は自然と継続していく。結果として子ども達は学校も好きになって勉強にも熱が入るものである。

＜意見交換＞ テーマ 社会全体で教育の向上に取り組むために  
～学校・家庭・地域の協働を進めるためには、何が必要か～

○ 安住 教育企画室長

- ・ 貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 国がこのたび策定した教育振興基本計画では、全体を貫く基本的な考え方として「横の連携：教育に対する社会全体の連携の強化」を挙げており、示された4つの基本的方向性としても「社会全体で教育の向上に取り組む」を第1番目に掲げている。さらに、特に重点的に取り組むべき事項として9つが挙げられている中にも「地域全体で子ども達をはぐくむ仕組みづくり」がある。
- ・ このような点について、皆様と議論したいと考えた。また、今回意見発表をいただいた5名の方々のお話が「地域」「家庭」に関するものが多かったことから、このようなテーマを設定させていただいた。
- ・ これまでは、教育というと基本的に「学校が主体となって」取り組むという考え方が多かったが、これからは、地域が主体者として学校の教育にも関わってくるようになる。それぞれのお立場から、どのような連携を図り、子どもを育成してあげればよいと思われるか。

○ 永山 晋 氏

- ・ 互いの特性を踏まえた共通理解をするための体制づくりが今最も必要である。学校の情報発信を重要視している。学校評価や内部評価を公開していくことや、外部評価委員会の設置等にも努力していかなければならない。家庭とのもっと強い連携のためには、相互理解が大切であるので、学校からの一方的情報発信ではなく、学校主導での協働体制づくりをして、お互いの立場をきちんと話し合うことができるようにしていく必要があると考える。
- ・ 学校の中だけで子どもの健全育成を考える時代ではない。個人のプライバシーに関わる問題では、全てをオープンにすることはできないが、どこまでオープンにできるか、できないかを確認しながらゴールを目指していくことが大事である。
- ・ 保護者に「当たり前なことが通じない」と感じることもある。PTA懇談会など、本当に来て欲しい親が来てくれない問題をどう解決するか、学校でもいつも悩んでいる。今後も考えていかなければならないし、行政からの支援のしくみも構築していく必要があるのではないかと。

○ 網川 誠 氏

- ・ 学校、家庭、地域が役割を明確にし、それぞれ責任を担っていくことが今大事である。今年度から学校地域支援本部という事業が始まったと聞いている。これらの制度をうまく活用してやっていきたい。
- ・ 地域の人や保護者には、できるだけ学校に来て欲しい。
- ・ 教育の専門家ではない人が学校に来て教育に参加し、刺激を得ることが学校教育では有効である。

○ 櫻井 美砂子 氏

- ・ 学校、家庭、地域の三者が何かをしようという時、地域の中にはマンパワーがたくさんある。しかし、家庭によっては、学校にも、地域にも入ってこようとせず、個人を大事にしようという層をうまく呼び込む働きかけが必要である。誰がリーダーシップを取るのかという問題がある。
- ・ 何かしようとする時、学校が壁を作ることがあるように感じている。虐待などの問題が起きたとき、学校は、問題を隠し、広げずに解決しようとする印象を持っている。「見守りましょう」という結論になって、結局何も解決できず、その子が転校して行ったことで終わってしまった事例もある。
- ・ 家庭の問題として、ひとり親家庭が多いということがある。普通感覚で話しても理解できない人なども少なくない。理解を求めたり導いていくのが難しいが、一つずつやっていくしかない。
- ・ 地域への呼び込みが必要である。また、声をかけても来ない人への働きかけの方法を工夫していかなければならないし、行事を主催する人の意識も変えていく必要があるだろう。

○ 工藤 忠雄 氏

- ・ 学校、家庭、地域のうち、重点はどこかと思ったら家庭であり、親子関係ではないかと思っている。
- ・ 平成19年から「親子ものづくり教室」を開催している。小学校3～5年生と親が、3時間ほどかけてロボットを作る。はじめは喧嘩したりしているが、帰る頃には親子がすっかり仲良くなって、手をつないで帰って行く。

- ・ ものづくりに限らず、スポーツなど、良い親子関係を作るための場づくりが必要である。

○ 村上 利仁 氏

- ・ 私も、教育の原点は家庭にあると思う。家庭が上手くいかない、学校に行っても魅力を感じることができず、面白くないのだと思う。
- ・ スポ少にできるだけ加入して活動をしていただきたい。スポーツをする環境に子どものうちからなじむと、体も心も健康になる。
- ・ 人間同士の信頼関係を築くことを学習できる場が必要である。

○ 高橋 高校教育課長

- ・ 貴重な御意見をたくさんいただき、大変感謝している。
- ・ 仙南広域工業会様には、ものづくり教育に関連して、高校生のインターンシップや教員の研修の受け入れで大変お世話になっている。インターンシップに参加した生徒は、大変大きく成長してくるという話を学校から聞いている。地域の産業界が果たす教育的効果の大きさを改めて実感している。
- ・ 学校に来て欲しい保護者がなかなか来てくれないという悩みは、高校でも抱えている。親子ものづくり教室の話は大変参考になった。高校の中でも、親子関係や信頼関係を築く仕掛けが何かできないか、考えていかなければならないと思う。

○ 本明 義務教育課副参事

- ・ たくさんの御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 学校は閉じられている、という話題があったが、ひと頃に比べると、かなりオープンになってきている。学校だよりを地域住民の方々に見ていただけるようにすることや、ホームページによる情報公開は、かなり広がりを見せてきている。しかし一方で、見てもらえなければそれっきりになってしまうという欠点もある。
- ・ 学校が地域住民に何を求めているのか、また、地域は学校に何を求めているのかを、お互いに身近に触れあいがら知っていかなければならない。
- ・ 親子関係について、心と体の問題が言われてきている。子どもと自然との関係が閉じてきている。かつては、親が自然との関わりの中でルールを教えてきたものだが、今のインターネット時代には、親がルールを教えきれない。子どもが何をやっているのか、誰に迷惑をかけているのかも全く分からないという状況が実際に見られる。学校においては、どのような状況でインターネットでいじめが起こっているのか、子どもの世界を知りながら、対応していかなければならない、と感じている。

○ 後藤 生涯学習課長

- ・ 今日、非常に参考になる意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 学校支援地域本部やみやぎらしい協働教育事業など、学校、家庭、地域が連携する仕組みづくりを担当している。
- ・ スポーツ少年団、公民館、行政、民間の様々な人材育成事業がこれまで行われてきて、地域には眠っている資源があると感じている。行政の悪いところとして、新しいものに目を向けがちだが、地域資源は、蓄積されたものをいかに洗い直し、うまく活用していくことによって、教育の場づくりができるのではと考えている。
- ・ 学校、家庭、地域の誰がリーダーということではなく、それぞれがそれぞれの責任において役割を果たすものである。学校が地域に活用される立場になっていただきたい場合もある。地域が責任を分担して、教育体制を築いたり、人材育成を担うということが協働教育の主たるテーマである。地域資源を有効に活用し、場づくりをすることが重要である。
- ・ 地域、家庭の教育力に課題が多いという現実直面している。しかし、まだまだ肯定的に捉える部分はある。子育てに自己肯定力が一番大事である。健全に明るく元気に育っている子どもがたくさんいる、ということもアピールしていく必要があると考えている。若い夫婦にとって、家庭教育、子育ては大変だという否定的な考えだけでは、うまくやっていけない。課題は課題として認識し、解決に向けて行きながらも、肯定できる部分はアピールしていくという視点を持ちながら施策を考えていくことが、今後は必要だと考えている。

○ 中川西 教職員課県立学校人事専門監

- ・ 大変参考になる御意見をいただき、感謝している。
- ・ 壁を作っているのは、学校ではないか、というお話があった。教育サイドには、「子どもの教育は学校で」とい

う自負がこれまではあった。しかし、現在、社会の状況が変わってきて、学校だけで問題を抱えきれなくなり、協働で何とかしなければならない、という共通認識ができてきているということが大事である。

- ・ これまでは、家族、地域など、集団の中で、子どもの持ち味が、いわば発酵してきたものだが、少子化が進み、そのような土壌がなくなっている。地域の子は、地域が育てるという観点を持たなければならない。三者が連携して、地域の子ども一人ひとりを、その子の特性を生かし、小さいうちから育てていくシステムづくりが重要である。
- ・ 学校からだけの発信ではだめで、地域、家庭からの助言を受けてやっていかなければならない。

#### <傍聴者からの意見要旨>

- ・ 期待していた内容が話し合われず、残念である。この10年で日本が弱者いじめの社会になり、格差が広がって貧困世帯が急増している。今後の意見聴取会においては、壇上から降りて、本当に困っている子ども達のことを軸に、しっかりと考えて議論していくべきである。
- ・ 教員を増やすことが絶対に必要であり、県は、文部科学省からしっかりとお金を取ってこなければならない。そうしなければ何も変わらない。
- ・ 障害のある子どもに個別の指導計画を作ると言いながら、仙台市内でプレハブ校舎で勉強している障害児がたくさんいる実態がある。
- ・ 高校の全県一学区化は、地域の子どもを地域で育てようということに逆行する。「小学校から競争しなければ、高校に入れない。」という予備校のうたい文句が目につく。地域協力は、形だけのものではないか。
- ・ 働いても働いても生活できない親がいる実態がある中で、親が悪いと言っても何も始まらない。この子ども達を救うために、社会が何かしなければならぬ。
- ・ 教育行政が反省しなければならないことがたくさんある。家庭教育の前に、大人が自分たちの問題として考えるべきである。
- ・ 新しい教育を立てる時には、反省と総括が必要である。今後、授業時数が増えることにより、教員が子どもと向き合う時間の確保がますます厳しくなることが予想される。定数を増やすしかない。多くの現場の教員は、ぎりぎりのところでふんばっている。熱意だけが教員を支えている。
- ・ 予算に関しては、大河原地域1市7町のうち、5市町では、特別教育支援員が導入されていない。図書費は、9市町すべてが地方交付税に対し100パーセント以下で、最低の町村は9.1パーセントである。共済費は、全ての8市町が100パーセント以下で、最低のところは6.3パーセントである。このような状況は、問題である。
- ・ 子ども達が笑顔になれるよう、教員が良い授業をし、良いサイクルが作られるよう、条件整備をしていただきたい。
- ・ 地域資源、人材という言葉を知っていて、違和感を感じた。人間を育てることと人材を育てることは異なることを認識しないと良い教育はできない。
- ・ インターネットによるいじめなどにより、子ども達の心が病んでいると感じる。世の中や教育のシステムが、このような状況を生んだ。入試や能力別授業で子どもは傷ついている。
- ・ 全国一斉の学力テストは、できる子とできない子に分けることで、家庭を追い込んでいる。
- ・ 放課後子ども教室が、希望者が多く、抽選でしか入れないようなので、入りやすくしていただきたい。



(4) 仙台地区

日時：平成20年7月13日（日）14:00～16:00

場所：宮城県庁行政庁舎2階講堂（仙台市青葉区本町3-8-1）

出席者：	教 育 長	小林 伸 一	意見発表者：	名取市立増田小学校
	教育企画室長	安住 順 一		校長 根 來 英 雄 氏
	教 職 員 課			多賀城市社会教育委員
	県立学校人事専門監	中川西 剛		阿 部 豊 子 氏
	義 務 教 育 課			仙台高等学校
	副 参 事	本 明 陽 一		校長 石 井 正 樹 氏
	高 校 教 育 課 長	高 橋 仁		高機能広汎性発達障害児親の会
	生 涯 学 習 課 長	後 藤 康 宏		(シエルの会) 元会長
	特別支援教育室長	伊 藤 倫 就		菅 野 義 久 氏
	仙台教育事務所長	佐々木 一彦		仙台市子育てふれあいプラザ
				のびすく仙台
				館 長 伊 藤 仟 佐 子 氏
				仙台市スクールガードリーダー
				小 幡 昭 夫 氏

<意見発表要旨>

○ 根來 英雄 氏

- ・ 増田小学校は、四十四番学校としてスタートし、今年135年目、名取市立となって50年を迎える歴史と伝統のある児童数726名の大規模校である。現在も、地域の中心校として多くの方々にご支援、ご協力をいただいている。
- ・ 教育基本法改正、教育改正3法の成立、学習指導要領の改訂と、教育の改革が加速されている。これらの流れを貫くものとして「生きる力」があり、文部科学省からは、「変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の知・徳・体をバランスよく育てることが大切である。生きる力とは、このような知・徳・体のバランスのとれた力のことだ」と示された。
- ・ 各小中学校でも、児童生徒に知・徳・体をバランスよく育てることは、学校の教育活動全体を通じて目指すべき最大にして最終の目標としており、それをさらに噛み砕いた具体目標や目指す児童像を設定するなどして、実現するように努めている。
- ・ 知すなわち学力については、宮城県の子供達の学力水準が決して高いものではないということが、様々な調査結果に示されていることから、しっかりと取り組まなければならない重要な課題であることは言うまでもない。学力向上は、県教委の重要な施策の一つであり、我が校でも学力調査の結果を詳細に分析して指導の方策を立て、保護者にお知らせするとともに、教師が毎日の授業での指導に生かすよう努めている。子ども達が「分かる」「できる」と実感できる授業の実現に向け、指導法の工夫を図っており、理解度に応じた少人数指導やティームティーチング、個別指導も取り入れている。
- ・ 学力向上策で一番の鍵を握るのは「教師の指導力」であると考えている。教師の指導力向上は、確実に子ども達の学力に反映される。
- ・ 徳すなわち子ども達の心を育てる指導については、学力同様重要な問題であると同時に、いじめ、不登校、規範意識の低下、基本的生活習慣の乱れなど様々な要素が絡んでいる。
- ・ 全児童にルールを、発達段階を考慮して段階的に指導しており、基本的規範意識を育てたり、人格形成に波及する道徳の授業の充実に努めている。
- ・ しかしながら、多様で豊かな体験や、モデルとなる大人の存在が不足していると、子ども達に道徳の授業を受け入れる素地が不十分で、道徳の指導は表面をなぞっただけの、心に深く響かないものになってしまう。物質的豊かさを享受して育っているかのように見える子ども達は、様々な体験を味わうという精神面では、果たしてどうなの

だろうかという印象を持っている。

- ・ このようなことが、学校の指導と結果にずれを生じ、教師の悩みやストレスを生んでいる。
- ・ 体すなわち子ども達の体力については、宮城の子ども達は体格は全国で1, 2を争う上位にある一方で、体力はかなり下位にあり、持久力や瞬発力が求められる種目で、多くの学年が全国平均を下回っていることが指摘されている。
- ・ 虫歯も多く、都道府県ワースト上位の常連である。
- ・ 我が校においても、体力がない子や肥満傾向の子どもが少なからず見られる。学校ではこれらの改善に努めているが、保護者の理解と協力なしに効果は十分上げられない。
- ・ 小学校に勤めていて考えることは、義務教育9年間は、人間の最も基本となる土台を形成する時期であり、「知・徳・体」バランスよく調和した児童生徒の育成を図ることが求められている。
- ・ 教師の指導力、保護者・地域の問題など、子ども達よりも、むしろ大人の側に問題があるのではと感じる。
- ・ 県の行う、基本的生活習慣定着のための「はやね・はやおき・あさごはん」運動も、家庭の協力無しに実現は困難である。定着状況は、保護者や家庭の姿勢が正直に反映されている。
- ・ 現状を良い方向に向ける事例としては、我が校にボランティア組織「増小守りたい」がある。不審者の出没に対して児童の登下校の安心・安全を確保するため、地域の祖父母世代の方々に揃いのベストを着て通学路等に立っていただいている。現在96名が登録し、小学生だけでなく中高生や大人とも挨拶を交わすようになっている。顔なじみになり、地域全体で子どもを育てようという意識が以前よりも強くなっているのを実感している。
- ・ 一方で、「後姿の教育」という言葉があるが、残念ながら、偽装問題に代表されるように、モデルや目標にしたくない大人の例が枚挙にいとまがない。
- ・ そこで提案したいのは、郷土の優れた業績や成果を挙げた先人を、政治・経済・科学・教育・芸術・スポーツなど各分野から選び出し、道徳や総合的学習、社会科等の授業で活用できる指導資料を作成することである。生きた教育の素材モデルとして児童生徒が宮城の先人から多くのことを学び、啓発されて自分の目指す方向や仕事、夢などの実現に向け、学習や努力の強い動機付けとなればと願っている。
- ・ さらに宮城の風土として、優れた先人の業績を積極的に顕彰する気風を醸成できればとも考えている。

#### ○ 阿部 豊子 氏

- ・ 日ごろのボランティア活動等を通じて、これから重視しなければならないと思っていることをお話する。
- ・ 「平和を求め、自ら努力していく人間教育」が最も重要であると考え。昨今、「自分さえ良ければ」という風潮が蔓延しており、安心して毎日を暮らせないという危機感を持っている。平和のために必要なことは、「共に支え合い、共に信じ合い、共に生きること」である。人々の心にこれらのことが失われている。
- ・ 私が子どもの頃を振り返ると、家に施錠しなくても泥棒は入らなかつたし、悪いことをすれば隣のおじいさん、おばあさんに注意され、教えられた。どこの子も助け合い、連帯感を持っていた。
- ・ どうしたら心が育つのか。私は、学問ではなく、人と人との交わりの中での体験を通して体得するものだと思う。子ども達が、体験から学ぶ機会が狭められている。体験して失敗したり、生き物を発見したりする出会いがない。学校に行く時には街角に防犯の人達が立っている。回り道はできないルールになっている。集団下校で帰ってくる。親もいつ魔の手が伸びるか心配で、近所の公園で「一人で遊んで来い」とは言えない。
- ・ 学校の中だけで、子どもの心の教育を十分にできる環境でなくなった今、地域で子どもを育てることを大いに提唱したい。県が行う「みやぎらしい協働教育」の事業を「多賀城市生涯学習100年構想実行委員会」が受託し、活動してきた。モデル事業を実施した学校の実践報告の場への参加を全市民に呼びかけ、コラボの必要性を訴えかけた。県と学校だけでなく、市民が関わることを実践を通して考えた。
- ・ 子ども達の教育よりも親教育が必要ではないかと思う。学校を回り、校長先生などから様々な話を聞く。修学旅行に行けない子どもを可哀想に思い、校長先生が費用を払ってあげたが、その親は居留守を使ってお金は払わないのに、卒業式では子どもに貸衣装の袴を着せ、「草履の練習を学校でもさせてほしい」という。また、別の親は、「背広を着て革靴なので、体育館の床に何か敷いてくれ」と言う。貸衣装などで親に負担をかけたくないため、卒業式は休むという子どもも出てきている。また、親が過保護で、高校生になっても母親のロボットのようになっていて、学校の教師の言うことは一切聞かない子どももいる。これらはほんの一例だが、こんな世の中を許していいものかと思う。
- ・ 社会教育において、大人はどうか。公民館が、カルチャー化しているのではないか。町として社会教育面のどこに力を入れなければならないのか、という話し合いがなされない。行政にも責任があると思う。後期高齢者の制度は、一般市民が初めて聞いて驚いたことから騒ぎになった。市民にどんどん勉強の場を与え、理解してもらおうと

していかななくてはならない。

- ・ 地域の教育力を高めなければならないのは何故なのかをまず良く理解してもらわなければならない。全ての一般市民に理解してもらえるように、これからの施策を考えていく必要がある。
- ・ 高齢者教育について、社会教育・生涯学習研究家の三浦しんいちろう氏が、次のような趣旨の発言をされ、なるほどと思った。「リタイアした後、安楽余生を送ってしまうことが日本人の落とし穴ではないか。安楽だけに頼ったら衰えていく。読み書き、体操、ボランティアなどを行い、人間の全機能を死ぬまで使い、保っていかなければならない。人間関係で辛いことも体験する必要もある。」町でも老人大学などの取組があるが、職員が全てお膳立てをしてあげることが多い。子ども達の育成にも、町づくりにも参加し、今まで培ってきたノウハウを生かし、持っている力をさらに伸ばせるような高齢者教育が必要だと思う。
- ・ 学校教育の成果を挙げるために、学校も地域にとけ込むことが大切である。「コラボスクール」の体験を通して、このことの重要性を実感した。取り組んでみれば、教師が地域の人から学ぶことがたくさんあったり、最初は後ろ向きだった人達が、最後には「助成金がなくてもやろう」というまでになった。

#### ○ 石井 正樹 氏

- ・ 教育の目指すものは「社会の中での自立」である。人は一人では決して生きていけない。
- ・ 親、親戚、友人、近所の人々、教師など、自分に直接関わる人のみならず、一生会うことはない漁師や農家の人のお陰もあって生きていくことができるのだ。したがって、人は社会の一員となって初めて生きていくことが出来、自分を支えている人々を支え、社会を支える人間になろうという自覚を持ち、行動できる人間に成ることが大切である。
- ・ 学校教育の目指すところは、社会の中で自立できるように、またそのことを意識できるように育成することだと思う。そのために教科の教育活動があり、行事があり、生徒会活動、クラス活動、部活動がある。
- ・ ヘレン・ケラーは、サリバン先生から「ものには名前がある」ということを教わった時から劇的に変化した。このことから、人間の成長には、言葉による認識が決定的な役割を果たすことが理解できる。自然や人間社会がどのようになっているのかを言葉で理解することができるよう、教科の指導がある。
- ・ 35年間高校教師をしていて感じることは、高校生は35年前とほとんど変わっていない。16歳、17歳、18歳という年齢特有の喜びや悩みや批判心を昔と同じように持っている。
- ・ 一方で、多少の違いが見られる。印象として、集団の一員として自分の役割を果たさなければならないという意識や自分が行ったことが他の人にどのような影響があるのかということがなかなかイメージできない場面がある。メールでの誹謗中傷が社会的な問題となっている。
- ・ 生まれてから高校生になる年齢までは、大人から、どのような教育を受けるかでももの考え方や行動が決定的に異なってくると思う。だとすると、昔の高校生とここ数年の高校生の現象面での変化は、大人社会がもたらしたものでないか。
- ・ 私は、小学生の時、至る所に原っぱがあるところに住んでおり、幼稚園から小学校6年生くらいまでの子ども達が集団で遊んでいた。この中で、異なる年齢集団での社会性の基礎が出来てきたと思っている。
- ・ 現代の日本では、子ども達がみんな集まって遊ぶ場を失ってきた。塾に行く子どもが多くなり、時間的にも集まることができなくなった。このような中で集団での行動の在り方や社会性の基礎を身に付けるのは難しい。
- ・ このような状況で学校教育は何ができるのか。集団で活動する場と時間は、学校にある。高校で言えば、異なる年齢集団で活動できる場として、部活動、生徒会活動、文化祭、球技大会などがある。その活動の中で、集団での自分の役割や社会性を身に付ける。自分ががんばったことが他の人々に貢献できた、役に立ったということ自体が本当にうれしいということを実感として体験できるものである。
- ・ 自然とは、人間社会とはどのように成り立っているのかを、高校でおろそかにせず勉強することも大切なことであるが、集団で行う活動も高校生を育てる上で大切である。
- ・ 自分の生涯をどのようにより良く生きるかという意味での「キャリア教育」を学校教育の中で位置づけ、卒業後の進路の在り方も、自分の幸福を求めると共に、社会のため、人のために貢献できて初めて本当の幸福な人生を歩めるのであるという観点から、指導することが大切である。

#### ○ 菅野 義久 氏

- ・ 平成17年の宮城県障害児教育将来構想の基本理念である「障害の有無によらず、全てのこどもが地域の小、中学校で共に学ぶ教育を子どもや保護者の希望を尊重し展開する。」という考え方に基づく教育システムについて、本当の意味での教育の平等といえるのかを考えてみたい。

・ 共に学ぶ教育のメリット

- ①障害を持つ子供は、その子の障害の程度に即した支援や教育の方法、システムが必要である。その中であえて一斉授業で健常児と一緒に学習することは、相手の立場を理解すること、思いやる心を育てること、お互いに助け合って生きていく意味を教えることができる。
- ②対人関係を苦手とする情緒障害を持つ子供にとっては、他の子ども達と一緒に学ぶことで社会性を身に付ける良い機会である。このためには、新しい学習システム、マンパワー、校内の強力な支援体制が必要である。
- ・ 一方で心配なのは、それぞれの子ども達にとって大きなストレスの場になるのではないかということ。この影響はいろいろな形で現れ、対応を間違えると取り返しのつかない事態になりかねない。
- ・ 障害を持っている子ども達にとっての平等とは、その子にとって一番合った教育環境を整備し支援すること。時には個別、時には一斉授業など、その場に適した授業形態を柔軟に取り入れる環境が必要である。
- ・ 子どもがパニックを起こした時に、その対応としてリソースルームなど自己を取り戻せる部屋を確保する。
- ・ 個別指導計画を作成する時には保護者を交えてオープンにしながら方針を立てていく。
- ・ 校内の支援体制を透明化し、どの先生に相談すればいいのか窓口を一本化する、対応が思わしくない場合はどう対処すればいいのか保護者全体に明確に示すなど、その子に合った環境を整えて教育を行うことが本当の意味での教育の平等である。
- ・ 実際の教育現場はどうか。障害別のマニュアル本が先行し、障害の名前にとらわれ、マニュアルどおりに対応するなど、その子どもが持つそのままの性格や資質が見えなくなってしまうがちである。個別指導計画の必要性が再認識されるべきである。
- ・ 小・中学校で展開している特別支援教育、通級指導教室に準ずるシステムを就学前の保育園、幼稚園に作る必要がある。現在ある統合保育だけでは不十分である。早い時期に適切な支援を受けることで、いろいろな対応が身に付きやすくなり、就学前の準備がスムーズになる。就学後の学校側の対応も容易になる。
- ・ 通常学級では適応が難しいというマイナス思考ではなく、特別支援教育、通級指導教室に対する抵抗感をなくし、この子にとって一番いい教育環境を整備するというプラス思考で取り組むことが大切である。
- ・ 高等学校、大学においても、小中学校同様に、特別支援教育の校内支援体制を整備していかないと、小中学校で手厚く支援が行われてきて上手く適応していた学校生活が突然途切れてしまう。高校、大学でこそ軽度発達障害を持っている子ども達へのメンタル的なサポートが必要である。
- ・ 社会性を育成するために、自分の気持ちを聞いてくれる人、上手に気持ちを整理してくれる人、色々なことを気づかせてくれる人、自分の存在を認めてくれる人が必要で、親ではその役割を果たせない。若い教員やカウンセラーが良い。
- ・ 子どもの将来の社会的自立を図る観点から、障害のある子ども本人や保護者の教育相談や進路、就労相談の在り方についても検討願いたい。
- ・ 個性を生かす教育と自分勝手なことを許してしまうことは違う。授業中突然立ち上がり騒ぎ出す、友達を噛んだり叩いたりするなど、子どもが間違った行動をとった時は、家庭でも、学校でも、地域でも、親が、先生が、地域の人がきちんと指導していかなければならない。しかし、軽度発達障害を持つ子供が時としてこのような行動を取るのには、その場にきちんとした理由がある。子ども達が苦しんでいるその兆候、危険信号を第三者に知らせているのである。何も知らない第三者は注意し、辞めるよう指導し、子どもの態度が悪い、親の躰が悪いと思ってしまう。これでは何の解決にもならない。
- ・ さらに、子ども達の自尊心がその事で傷つけられ、自分は何もできないだめな人間なんだと思いこんでしまい、サポートがあっても立ち直れなくなってしまう。これだけは絶対避けなければならない。
- ・ 自分自身を大切に思う気持ちは、どの子どもにも必ず必要なことである。自尊心を育てることは、相手を敬う気持ちを育てる事でもあり、心を豊かにし、教育の向上に結びついていくものである。このような教育の在り方を検討願いたい。
- ・ 宮城県の発達障害者団体のネットワーク「発達支援ひろがりネット」が昨年度発足し、今年度から中小企業経営者と保護者会が共同で就労支援のプロジェクトを立ち上げ、就労支援「ジョイフル・ジョブ」がスタートしている。このような就労支援を宮城県も積極的にサポートするとともに県自ら取り組み、運営できるよう就労支援センターを早期に立ち上げることを望む。

○ 伊藤 仟佐子 氏

- ・ 仙台市子育てふれあいプラザ「のびすく仙台」は、仙台市から指定管理を受けたNPO法人が運営している。平成16年にオープンした。主な事業は次のとおりである。

①広場事業…親子が集う場所の提供

②情報収集提供事業…子育てに関する情報をホームページ、「ふわふわ」通信、チラシ配布などで提供

③一時預かり…一時間600円で、9時半から6時まで、理由を問わず預かる。母親のリフレッシュ目的が多い。

- ・ 会員は、現在25,000名。一日平均100組の親子が施設を利用している。
- ・ 上記3事業に加え、相談事業も随時行っており、昨年は191件の相談があった。職員が相談を受けている。保育士資格を持つ者は、5人中2人。ほとんどの相談内容は、何をいつ食べさせればよいのか、オムツはいつ外したらよいのかなど、家に父母や、近所に知り合いのおばさんなどがいれば相談し解決できるような内容である。近所に相談できる人がいなく、地域の中で孤立しているため、わざわざ交通費をかけて「のびすく仙台」に相談に来ている。
- ・ 今の母親達は、子育てについての教育は受けておらず、約半数が、生まれて初めて抱っこした赤ちゃんが、今自分が生んだ子どもでもあると言う。無免許で、運転の方法を知らないのに、いきなり高速道路を走っているような状態である。支援者である我々は、運転を代わってあげることはできない。隣に座ってあげられるだけである。
- ・ 手探りで子育てしているお母さん達は、「何もしない」と言われるが、何もしないのではなく、「何も知らない」のである。きちんと教えてあげればできる。有名な大学を出ていて教養が高いが、常識がない場合がやや多く見られる。三食御飯を作って食べさせる、ということを知らなかった人もいる。
- ・ 「のびすく仙台」で、物が盗まれることも良くある。子どもの目の前でそういうことをしているということである。絵本やおもちゃも頻繁になくなる。
- ・ 「つながりたい」という気持ち強いがつながり方が分からない。体験が不足しているためかと思う。友達を欲しがっていて、「のびすく」にやってくる。そこで、お母さん達をつなぎ合わせるイベントを多数企画している。
- ・ 様々な体験や、家での躰を通じて常識が身に付くものだと思う。このような人達は、既に親になってしまっている。このような人達の教育は、早急にやらなければならないのではと思っている。
- ・ 一番早い人で、退院してすぐに来る。首も座らない赤ちゃんを連れてくる。家に一人では不安だと言う。
- ・ このような状況であるので、子どもを取り巻く環境は大変変わってしまっている。思春期になった時に、今我々がやっている子育て支援の結果が出るのではないか、人間の土台作りという、大切な仕事をさせていただいていると思っている。

○ 小幡 昭夫 氏

- ・ 文部科学省の「地域ぐるみの学校安全体制整備推進事業」の一環として、防犯の専門性を有する警察官OBを仙台市が委嘱し、学校の巡回指導とその評価、学校ボランティア防犯巡回員への育成指導等を行っている。今年で3年目になる。平成18年は5人が委嘱されたが、平成19年度からは8人体制となった。
- ・ この制度が出来た背景としては、平成13年に大阪教育大学附属池田小学校に不審者が乱入し、生徒を殺傷された事件、平成17年には大阪市寝屋川の小学校で教職員が殺傷されるという事件があり、これらを契機に、学校の危機管理マニュアルの見直しが特に叫ばれるようになった。
- ・ 凶器を持った不審者が乱入した場合どのように対応したらよいのか、ということを示すマニュアルを作成し、これに基づいて避難訓練を行う学校が増えている。
- ・ もともとは、児童生徒が安心して学び、教職員が安心して教育を行う場所という認識が強かった。
- ・ 仙台市スクールガードリーダーは、担当区域内小中学校を1日3～5校回り、防犯上の問題、防犯マニュアルの点検等を行う。学区内の危険箇所を発見した場合は、当該校に対し、指導を強化したり、担当区域内の学校で防犯訓練を行う場合には、防犯訓練を指導や講評を行っている。児童生徒の問題行動についての相談があった場合は、初期的な対応についての指導助言を行っている。また、毎月1回、活動状況報告会、情報交換を行っている。週3回、年間120日巡回を行っている。
- ・ 学校を訪問する際に、私が最初に確認するのは校門である。学校によって、校庭が地域住民の生活道路になっていて、鍵が掛けられない場合がある。
- ・ 全職員が危機管理意識を高め、その方法を共有することが重要である。校門は、常に閉めておくことを前提に考えることが大事である。
- ・ 池田小学校の犯人は、「通用門が空いていたから入った。空いていなければ入らなかった。」と取り調べの際に話したそうだ。基本的なことを行うことで、このような事件が大分防げるのではないか。
- ・ 先生だけの力では、危機管理には限界がある。子どもの登下校を街頭で見守っている学校防犯ボランティア、巡視員には頭の下がる思いである。
- ・ 学校では、一人の先生が問題を抱えることがないようにしていただきたい。担任に任せておけば良いということ

ではなく、全員で共有することが大事である。抱え込んだ先生は、ストレスから病気になってしまう。

- ・ 学校、地域、父兄が一体とならなければ、子どもを守ることはできない。
- ・ 私は、今後も、これらのことを各学校に伝え、先生方に確認していきたい。

**<意見交換> テーマ 社会全体で教育の向上に取り組むために  
～学校・家庭・地域の協働を進めるためには、何が必要か～**

○ 安住 教育企画室長

- ・ 国がこのたび策定した教育振興基本計画の中で、「社会全体で教育の向上に取り組む」ということが重要視されていることと、本日の皆様から、学校・家庭・地域の連携に関連するご意見をいただいたことから、このテーマを設定させていただいた。
- ・ 学校・家庭・地域の協働とともに、家庭・大人への教育も大事なかもしれない。計画を策定に向け、どのように考えていったらよいか検討するにあたり、ご意見をいただきたい。その後、県教育委員会から発言させていただく。

○ 根来 英雄 氏

- ・ テーマに関連した取組として、我が校では次の2つがある。

①教育懇談会

子ども達の問題、様子や学校の教育方針についての情報交換、意見交換の場としているが、学校と保護者だけでなく、地域の人に必ず入っていただいている。

②地区運動会

学校の運動会と合同で行っており、学校に5,000人が集まる。

- ・ 学校と保護者の一対一の関係ではなく、多様な人を取り込む仕掛けを考えていくことが、「社会全体で教育に取り組む」ことにつながると思う。

○ 阿部 豊子 氏

- ・ 学校、家庭、地域は、それぞれが協働教育の必要性を理解することが先決である。
- ・ 各学校でも協働を進めるための取組が様々になされているところだが、学校において、全職員が共通理解を持っていないといけない。家庭・地域に対しては、公的な立場で周知し広めていかなければならないし、地域住民に、協働教育の必要性を、手を変え品を変え仕掛けていって理解していただき、協力を要請することが前提となる。
- ・ 協働教育に関わってみて分かったことだが、「コラボ」の体制づくり、形づくりばかりが優先してしまわないように考えなければならない。カリキュラムなど、形づくりが先行すると、協働の取組がかえって弊害となる場合がある。ある学校の「豆腐づくり体験」に呼ばれて行って、実習している子ども達に質問してみると、それぞれの工程の意味が全く分からずに、ただ、先生にこの作業をやれと言われたからやっている、という子が多かった。何をねらいとして行う学習なのかをはっきり意識して、地域とつながっていくことが大事である。
- ・ 地域にいる専門家を十分生かしていき、その人達に主体性を持たせてもよいのではないかな。

○ 石井 正樹 氏

- ・ 単位制の定時制高校では、科目履修生制度があり、科目を選んで聴講することができる。これを単位制の全日制高校にも導入できないか。制度的にかなり難しい問題はあるのだが、これができると、高校生と40代、50代、60代の大人と一緒に学ぶことができるようになり、自然な形で地域との協働によって生徒の自立心を育てることにつながる。高校生が想像もしないような大人の質問にも触れることができ、社会に出た時の姿として、目の前にモデルができる。
- ・ 教員が、学校の外の世界をもっと知る必要がある。企業の方々との交流を通じて、彼らが、若者を労働力として捉えるだけでなく、将来の若者を育てたいという、教員と同じ意識を持っていることが感じ取れる。企業と学校が、教育について意見交換を行うのは有意義だと考える。単独の学校、企業ではなく、もう少し広げた形で相互に交流ができるとさらに良い。

○ 菅野 義久 氏

- ・ 少子化の影響で、子どもと地域が接触する機会が少なくなってきている。子ども達を理解する場、認めてあげるきっかけ作りを、町内会などを巻き込んで行ってはどうか。子ども達は、徐々に地域に溶け込んで地域の一員となれるのではないかな。
- ・ 長期の休みに地域のおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に過ごせるような機会があると、軽度の障害を持った子どもも、不安なく長期の休みを過ごすことができ、社会性が身に付く。ただし、地域の人々の理解がないとできない。

○ 伊藤 仟佐子 氏

- ・ 子育て支援は、教育でも指導でもない。お母さん達を認めてあげて、寄り添ってあげて、信頼を持っていただく。職員との信頼関係ができて初めて、伝えたいことを伝えていくようにしている。お母さん達が、もともと持っている「生きる力」を私たちが引き出してあげることが大切である。
- ・ 「のびすく仙台」は、広い範囲からお母さん達が集まってくるので、地域のつながりではない。自分の家から歩いていける距離に、支援してくれる場があるのが理想であるので、そのような場所が一つでも多くできることを願っている。

○ 小幡 昭夫 氏

- ・ 私が巡回している学校で、学校地域懇談会という会議を持っている小学校がある。これには、PTA はもちろん、各地区の民生委員、防犯協会、交通整理団、学校防犯ボランティア、交番所長、そして私が集まり、いろいろな問題について討議しており、非常に有意義である。過日、この会議で、通学路に道路が狭くて車が非常に近くを通るので危険な箇所があることが判り、警察署のアドバイスを受け、現職当時の知人である区役所の区民課長に相談したところ、区民課長がその担当は道路課だからと言って道路課長をお呼びして、現状を見ていただいた。その結果、まもなく停止線の位置を変えることになり、今までよりも子ども達が安心して通学路を通ることができるようになった。このような地域ぐるみの懇談会は、とても良い。

○ 伊藤 特別支援教育室長

- ・ 今年から、全ての小学校、中学校、高等学校において、特別支援コーディネータを置くこととしており、また、校内委員会も設置するように働きかけている。
- ・ 特別支援コーディネータ、スクールカウンセラー、巡回相談員などの専門家チームを活用して、できるだけ各学校を援助していくことに努めている。
- ・ 地域との関係では、平成16年から居住地校学習推進事業を行っている。昨年度は、25.1パーセントの特別支援学校の子どもが、居住地の子どもと交流をした。学校を通じてだが、地域との理解を深める取組である。
- ・ 特別支援教育センターでは、移動講座、公開講座などを行っている。また、要請があれば、学校へも校内研修会という形で、出かけて行く。PTAの方にも参加していただくこともある。

○ 後藤 生涯学習課長

- ・ 地域の中にあるネットワークや、人材を活用していこうということが、皆様のご意見に共通する部分であったと感じている。
- ・ 体験活動が重要というお話もあったが、学校や子ども会の活動を、老人会と行事を同じ日に重ねて一緒に行うなどの工夫によって、地域の人材、資源を絡めて子ども達に社会とのつながりを持たせていけるのではないかと。地域や家庭に、どのような趣旨でこれを行うのか、十分に説明して浸透させていかなければならない。そして、これを管理、指導する側は、お膳立てをし過ぎないようにし、できるだけ子どもにやらせて見て、失敗するところは失敗させて体験させることも重要であろう。
- ・ 我々としては、公民館等の持っている、これまで積み重ねてきたいろいろな社会教育資源があるはずであるので、それらの再掘り起こしをした上で、学校教育で使える部分、それ以外で使える部分など、洗い直しをしたいと思っている。
- ・ 家庭教育については、家庭のモデルというのは多分ない。支援というスタンスをとりながらも、家庭教育の重要性は認識していかなければならない。悩ましいところでもある。精神科医の和田秀樹氏も言っていることだが、厳格な母親がいる厳格な家庭で育った子どもが、重大な犯罪を犯した場合、この家庭環境を問題と見る節があるが、統計的には、厳格な家庭の方が犯罪発生率は低いはずであるので、事実をきちんと捉える必要がある。

<傍聴者からの意見要旨>

- ・ 最近、簡単に人を殺す若者の事件が目立つ。多くの教育関係者やマスコミが言っていることだが、宮城県が決定した全県一学区を実施すると、競争が激しくなり、子ども達が追い込まれる。その結果、大阪の池田小学校で事件を起こした宅間守のような人間が増えると思う。
- ・ 競争を無くすことが重要である。
- ・ 伊藤さんの話に大変共感した。PTA活動を通じて、父母も悩みを抱えていることがよく分かった。そこで、私の地域では、町内会の集会に、子育て中の人に参加できるよう、高校生アルバイトを使って託児付きで実施している。こうして顔を合わせることによって、翌日から、大人も子どもも互いに大きな声であいさつするようになった。20代、30代の方は、地域の人といっても信頼していいかわからないし、子育てについて知らないことも多い。「この人なら信頼して、何でも相談できる」と若い子育て世代が思えるような人をたくさん増やしていき、「のびすく」に行かなくても近所に相談できる場を自主的に作っていくことを教育振興

基本計画の柱として入れてほしい。官が作った政策だけでは限界がある。

- ・ 最近、親学という言葉がよく聞かれるようになったが、発達障害に関する科学的な研究の到達点を踏まえない文書や発言があることを残念に思っている。親に対する教育も確かに必要だが、行政が企画するもの、発行するものについては、科学的な論理を踏まえたものとするよう心がけていただきたい。
- ・ 保護者と学校が協働して新しい特別支援教育を創造していく取組を是非具体化していただきたい。科学的で効果のある支援方法の学習と普及を目指した自主的な取組に端を発して、他の人の指導ができるレベルに達している人が県内で数十人育っている。優れた特別支援教育の実践例を作っていくことが重要である。教育条件の整備は、全国的にも、県としても遅れていることに正面から目を向けて、計画策定の中で是非議論していただきたい。
- ・ 地域との連携や、学校と保護者が一緒に行う教育活動は、県で号令をかけて進めてしまうと、どうしても形を整えることに気を取られる傾向にある。職員室では、「こういうことをやってみたい」という話はよく出ている。必要性から生まれる取組をできるだけ教育条件を整えることを行政にはお願いしたい。新しいことを始める時には、準備をするための時間がとにかく必要であるので、教員を増やし、お金をかけるべきところにかけていただきたい。



(5) 登米地区

日 時：平成20年7月21日（月）10:00～12:00

場 所：宮城県登米合同庁舎 5 階会議室（登米市迫町佐沼字西佐沼 150 - 5）

出席者： 教 育 次 長 三野宮 斗 史 意見発表者： 登米市立米山西幼稚園

教育企画室長	安 住 順 一	技術主査	星 良 氏
教 職 員 課		登米市立佐沼小学校	
小中学校人事専門監	太 幸 明	校 長	片 倉 敏 明 氏
義務教育課長	竹 田 幸 正	特定非営利活動法人	
高校教育課長	高 橋 仁	すくすく保育研究所	
生涯学習課長	後 藤 康 宏	代表理事	堀田 菜菜江 氏
		登米市倫理法人会	
		会 長	伊 藤 俊 郎 氏
		とよさとマイ・タウンクラブ	
		会 長	佐々木 幸一 氏
東部教育事務所	登米地域事務所長		
	一 盃 森 広 志		

<意見発表要旨>

○ 星 良 氏

- ・ 家庭生活の都市化や地域社会での関わりの希薄化など、幼児を取り巻く生活環境の変化の傾向が登米地区でも見られる。
- ・ 幼児たちに、身支度の始末ができなかったり、食事の取り方の未熟さ、就寝・起床の不規則等、生活習慣の乱れが多く見られる。
- ・ 友達と関わる力も弱くなっており、コミュニケーション能力不足が見られる。一人で遊ぶことを好む幼児、友達をたたいたり押ししたりしてしまう幼児がいる。
- ・ 少子化の影響により、同年代の子どもと関わり、社会性を育む体験が少なくなってきた。
- ・ また、兄弟が少なく、幼児は自分で何かをしなくても全て周りの大人がやってくれる環境にある。目が行き届き過ぎていて、幼児に対する過保護や過干渉が、自立心・自主性・人と関わる力を奪っている。
- ・ 友達と関わりながらの直接体験が必要だと感じている。幼児に分かり易く、楽しみながら歯磨きの仕方、衣服の着脱、栽培物を育てたり食べたりすることが良いと思う。集団遊びも大切である。
- ・ 幼児の姿を詳しく知るために、家庭との密なる連携をしっかりと行うことが大切である。
- ・ 親は、幼稚園での幼児の姿をもっと詳しく知りたいと考えるが、一日のうち、長い時間養育しているのは、この地域では祖父母が多い。
- ・ 園児の姿を正確に伝えるとともに、しつけを促すことが必要だと考える。幼児の良い面を含めながら、正確に、また祖父母にも分かり易く伝えることが必要だと考える。
- ・ 幼稚園も、現在の社会や幼児の状況を踏まえ、教育課程時間外の保育、預かり保育もしっかり整備していくことが大切である。しかし、全てを受け入れることはできないので、地域の実態に合わせて、保育の時間や内容を定めていくことが幼児にとって一番良いと思う。特別な支援を要する幼児の受け入れについても同様である。
- ・ 幼児同士の関わりを基本としながら、もっと刺激があるように地域の大人と関わるのが大事である。また、小学校との連携では、大人より同じ子どもということで幼児はさらに興味・関心をもって積極的に関わるようになるのではないかと。そのため、我々教師同士も顔見知りになったり、互いの実態を知り、情報収集することが求められる。
- ・ 不安を感じ、幼児のことを知りたがっている親も多いことから、幼稚園のことをホームページなども活用して広く公開していくことも必要だと感じている。
- ・ 現代は、幼児にとって大変な時代である。幼児に直接関わる私達は、今までの考えから視点を変えて、一つ一つの問題に対応し、幼児に接していかなければならない。幼児が健全に生活できるよう援助していきたいと考える。

○ 片倉 敏明 氏

- ・ 佐沼小学校は、児童数774名、学級数27学級、教職員数46名の大規模校である。
- ・ しかし、不登校児は一人もいない。学校の誇りとするところである。
- ・ 不登校に陥る時、子どもには必ず葛藤があり、心の中で学校と家庭の綱引きをする。「学校に行かなければならない。」「でも行きたくない。行けない。」という2つの選択肢の中で後者を選択することで不登校に陥る。
- ・ 不登校児童が出現することは、学校への何らかのサイン、警告である。このことに気付き、受け止める力量が我々に求められている。学級経営、学年経営、学校経営に問題はないのか、早急に点検する必要がある。
- ・ 子どもが「今日も学校に来てよかった」「明日も学校に行きたい」と思えるように、信頼関係を築くことが重要である。
- ・ 教師と子どもの信頼関係の基本は「授業づくり」である。質の高い、魅力ある授業を行うため、教員の資質向上が不可欠である。このために、校長の強いリーダーシップが必要である。
- ・ 教育基本法、学校教育法の改正等により、地方分権から学校分権に変革していく今こそ、質の高い学校経営が必要である。学校経営の基本は「不易」を大切にしつつ「流行」を求めていくことである。
- ・ 学校経営の視点として①学力向上の側面（授業を変える）②教職員の資質向上の側面（教師を変える）③学校経営の側面（学校を変える）の3つがある。この中で、校長として特に大切にしているのは、②である。どんなにすばらしい提言があっても、地域や保護者の素晴らしい意見があっても結局は教師こそが改革のキーパーソンである。魅力ある教師を作ることである。
- ・ 冒頭に話した不登校の問題は、別の表現をすれば、「学校が、学校としての機能を果たしているのか。」ということを問うているものである。「あなたは、どのような学校をつくらうとしているのですか？」と問われているのと同じことである。すなわち、「校長の質」が問われているということを教えているのである。

○ 堀田 菜菜江 氏

- ・ 私は、中田町の学校法人さくら学園に勤務しており、子育て支援部門を NPO 法人すくすく保育研究所で運営している。13年前、わが子を出産し、子育てサークルをスタートし、10年後の平成17年に法人化した。
- ・ 子どもと親、それを取り巻く人々と環境に対して、安心して子どもを生み、育てることができる地域づくりの子育て支援事業の提供、共に地域社会の中で支え合い、子どもの幸福を考え、命のつながりを伝えていく使命を確認し、自分達の地域は、自分達で守り、充実させていくことを目的としている。
- ・ 16歳の長女、13歳の長男、8歳の次男がいる。初出産では、嬉しさや喜びを感じたのは、病院にいた時だけだった。ふと周りを見ると、今までと人のつながりが変わり、なんとなく居場所がなく、孤独を感じた。慣れない子育てであたふたと育休を過ごし、早く職場に復帰することを考えていた。仕事をしていれば、社会、人とつながっている安心感があった。
- ・ 当時既に少子化の問題は深刻になっていたが、私が次男を出産した頃には、少子化傾向に歯止めがかからず、国を挙げて社会が子育てを支援していく流れに差し掛かっていた。子育ては、各家庭の中で行うものと見られる風潮から、核家族化が進む中、もっと外に出て人とつながろう、育児を楽しもうというサークルブームが到来した。子育て情報誌が本屋のコーナーを賑わせていた。
- ・ 子育てサークル「すくすくサークル」を立ち上げた。初日は、母と子3組が集まり、約3時間初対面であることを忘れ、出産や子育てについて話をして盛り上がったことを今も鮮明に覚えている。その後、口コミでサークル情報が広まり、多い時には50組の登録があり、まだ行政が着手していない部門でもあり、行政窓口からの紹介で入会する人も多かった。
- ・ 仕事をしていなくても、一歩外に出て人とのつながりを持ち、社会の動きを知ることにより、孤独な子育てから抜け出す、そして初めて自分の足で新しい場所へ踏み出せたという勇気が、楽しい子育てへと結びつくことを、仲間の姿を通じて知った。
- ・ この関係性は、メンバーは変わっても、子育てネットワークとして続いている。自分が小さい子どもを持っていた時に助けてもらったからという思いで、次の人たちにもつなげていきたいというような、深い愛情でつながっている。
- ・ 常に前向きに進めたわけではない。子育てに関する研修会や会議において、「子育ては孤独なものだ」という私の発言に対し、「なぜ、自分の子どもを生んで育てて孤独なのか。気持ちの持ちようだ。昔はそんなことはなかった。」などと責められることがあり、泣きなくなったこともある。
- ・ 赤ちゃんをおんぶして、小さな子を連れているベビーカーを押している人を見かけ、声をかける時には、「よくやってるね。がんばってるね。応援しているよ。」など笑顔で接してあげて欲しい。子育て中の親の心がふと軽く

なり、がんばろう、と思える。「世の中捨てたものじゃない。もう一人産もうかな。」とすることができる。私自身、そのような声がけや、いつも差し出してくれる手があったから、一生懸命子どもと関わり、育てていこうと進んで来られた。

- ・ 子どもの成長にしたがって、親として手をかける子育てから、未来へと生きていく力をつけるために見守る子育てへと移っていくことを知るようになると、親自身が今の環境だけではなく、幼稚園や学校との関わり、地域とのつながりを知るために、向上しなくてはならない。安心できる家庭があるのは、信頼できる幼稚園、学校の先生や見守ってくれる地域の人たちがいるからである。人と人とのつながりが順調で、気持ちを共有できていれば、人は勇気を持って次のステップを踏み、乗り切っていけるのではないか。人が生きていられるのは、体も心も、命のつながりがあるからだと思う。
- ・ 「生まれてきてくれてありがとう」という思いを我が子に伝えていくことが、次の世代にもつながって行くことを信じている。私がこの地域のためにできることは、生きることのすばらしさ、命のつながりの大切さを共に考えていくこと、そして、親と子の愛情を確認し合える場を、移りゆく時代に沿って、心のネットワークとして継続していくことである。子どもをどう育てたいかという思いだけでなく、子育てをどう楽しむか、自分を育てる「育自」がとても大切である。
- ・ 最近特に毎日少しずつ親になっていっている、と感じる。親として生きることを子どもに教えてもらっている。子ども達の未来のために、家庭での教育、幼稚園、学校教育、そして地域とのつながりを大切に、これからも進んでいきたい。

○ 伊藤 俊郎 氏

- ・ 昭和49年から飲食店を経営している。従業員確保に悩んだ時期があったが、かねてから社会奉仕活動をしながら、自分の行動を示しながら、日本の伝統文化である日本料理の寿司店を継続していきたいと思っていた。
- ・ 補導委託制度は、15歳から20歳までの犯罪を犯した青少年の育成である。鑑別所で3週間拘束され、社会復帰したいものと少年院に送るべきものの区別をした時に、補導委託先が住み込みで面倒を見る。
- ・ 昭和63年から補導委託を受けている。「明るい豊かな町づくり」「犯罪のない地づくり」を本当の意味で行っている自治体は果たしてあるか。
- ・ 補導委託先は、宮城県に1か所しかない。東北を合わせても数軒。
- ・ いわき市、鹿児島、地元から来ている子どもを採用している。預かった当初、いきなり過去の話をするにしている。すると子どもは、嫌な顔をして「もう聞きたくない。」という。そこで、「お前の過去は今後絶対触れないから、安心して仕事をしろ。」と約束する。このことにより、のびのびと仕事をしてくれる。
- ・ これらの子ども達の問題は、まず家庭にある。ほとんど両親は離婚しており、生活力がない。学校に入っても、一時的な試験に合格しただけであり、3年間をクリアするくらい義務教育の中で学力を蓄えているわけではない。義務教育は、ただ学校に通っただけである。
- ・ 高校に入ってみたものの3年間続きそうもないと思うようになり、退学に向かう。この子達が社会に出た場合に、社会が受け入れる環境にない。この子達に目を向けているとは思えない。前向きな学力社会だけを作っている。世の中には陰と陽がある。頭の良い者、頭の悪い者に区別されている。逆説的な教育があるのではと考えている。
- ・ 私の職場では、入ってきた子に、いきなり包丁を握らせる。手を切るので、「大丈夫か。」と聞くと「大丈夫です。」という答えが3回聞けば3回返ってくる。「では、どこまで切ったら痛いのか実験するから、手を出しなさい。」と言うと初めて「痛いです。」と言う。そういう子どもが多い。
- ・ 今、日本の伝統である技術が低下してきている。勤勉という日本の良さが今後も保たれるのか、非常に不安である。
- ・ 毎週火曜日朝6時から7時まで勉強会を行う「倫理法人会」を立ち上げている。火曜日は仕事が休みの日だが、従業員達は付いてくる。トップが変わらなければ人は変わらない。また、従業員を教育することによってトップはとても楽になる。
- ・ 当社の経営理念「一、私達は、慈しみの心で『感動料理』に挑戦します。」は、「理念作り」の勉強会に行かせた30歳になる従業員が作ってきたもので、それまで30年間使ってきた経営理念はその日で捨て去り一新した。すると、従業員がとても活発にやる気を見せるようになった。
- ・ 時代の変遷に伴い、「観念を捨てること」が大事なのではないか。人間は、要求だけをする幸福の求め方をしがちである。倫理法人会テキストには、「万人幸福の栞」17か条がまとめられており、これを毎回朗読しているが、まだ身に付いていないが、やり続けることが大事だと思っている。
- ・ 倫理法人会が目指しているのは、個人として、家庭人として、職場人として、地球人として、学び続けていくこ

とである。倫理運動は、全国571か所、会員数5万社を達成している。内モンゴルの砂漠の緑化活動も現地に赴いて行っている。

- ・ 会報である「職場の教養」には、大変ためになることが書いてある。学校、教育現場も職場なので、会員になることはできる。是非、一度我々の朝の活動を見ていただきたい。

○ 佐々木 幸一 氏

- ・ 学校や行政主導のスポーツ振興に限界を感じており、地域や住民が主体となるスポーツクラブが必要ではないかと考えていた。ちょうどその頃、平成12年に文科省が策定したスポーツ振興計画の中で謳われた生涯スポーツ振興の大きな柱である「総合型地域スポーツクラブの推進」が、我々の考え方と方向性が似ていたため、これに取り組みようということになった。また、同時期にスポーツ振興くじ toto が財源の裏付けとなり、追い風となった。
- ・ 一番の直接なきっかけは、少子化の影響による生徒数の減少で、学校での部活動やスポーツ少年団の活動にかなり制約が出てきたことである。
- ・ このような経過を踏まえ、平成16年9月に「とよさとマイタウンクラブ」を立ち上げ、現在は、運動公園など、3つのスポーツ施設の指定管理者をしている。
- ・ クラブの活動理念として当初からあった「青少年との関わり」が大きな柱である。部活動やスポ少が難しくなっている問題もあることから、継続して活動支援をしていけば、競技の一貫指導と競技力の向上が見込めるのではないかと考えた。指導者は、ボランティアである。
- ・ 卓球、バドミントン、よさこいなどの教室・サークル活動もいろいろと展開しており、大人から子どもまで参加している。地域住民の交流拠点になれば良いと考え、多数のクラブ活動を展開することにより、多くの人が集まってきた。スポーツ振興がメインで作ったクラブだが、他の様々な活動の原動力になれるのではと思っている。例としては、未就学児対象の親子参加行事、小学校低学年の放課後スイミングスクール、シーズンで出来るスポーツ、高学年から中学生向けには、スポーツ講演会を行っている。トッププレイヤーによるスポーツ実技指導。スポーツ体験を通じて、子ども達に夢を育むことができると願っている。
- ・ 文部科学省の「子どもの生活リズム向上事業」を申請したところ、今年度採択となり、活動を開始した。学校、PTA、老人クラブ、婦人会、町子連、公民館等による実行委員会を組織し、地域連携を図っている。学校で行われている「朝読書」、老人クラブ、婦人会、町子連などが学校と一緒にいる「あいさつ運動」、PTAと連携した「食育講習会」、親子早朝ウォーキングなどを企画している。
- ・ 3つの施設の指定管理者として、低コストでサービス向上に努める役割があるので、施設をより多くの人に利用してもらえるような行事も企画していきたいと考えている。
- ・ 地域の交流拠点としての機能を高めたい。地域振興のいろいろな動きにつなげていきたい。
- ・ 今後、活動を展開するには、組織の継続性が必要である。任意団体として活動しているが、今後は、NPO 法人を取得する必要があると考え、現在申請の準備をしている。これらの活動が軌道に乗っていけば、スポーツ振興以外にも幅広く活動分野を広げていけると期待している。

<意見交換> テーマ 「生きる力」を育てるために  
～学校・家庭・地域社会の役割は何か～

○ 安住 教育企画室長

- ・ 貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 国がこのたび策定した教育振興基本計画では、全体を貫く基本的な考え方として「横の連携：教育に対する社会全体の連携の強化」を挙げており、示された4つの基本的方向性としても「社会全体で教育の向上に取り組む」を第1番目に掲げている。さらに、特に重点的に取り組むべき事項として9つが挙げられている中でも「地域全体で子ども達をはぐくむ仕組みづくり」がある。
- ・ このような点について、皆様と議論したいと考えた。また、今回意見発表をいただいた皆様から、幼児教育、学校経営、子育て支援、補導委託、倫理法人会の活動、スポーツを通じた健全育成のお話があり、共通して「生きる力」に関連しているということ、学校、地域がそれぞれの役割を果たしながら連携していくことが、登米地域の子ども達にとって大事なのではないかと考え、このようなテーマを設定させていただいた。
- ・ それぞれのお立場から、学校、地域、家庭がどのような連携を図り、子どもを育成していけばよいと思われるか御意見をお伺いしたい。

○ 佐々木 幸一 氏

- ・ 若い人達がいつもメールを打っていて、あれで人との会話が全部成り立つのか、コミュニケーション能力に不安を感じる。スポーツの中でコミュニケーションを磨いていく必要があると特に感じる。
- ・ 生活リズム向上は、単年度事業であるので、今年一年やってみて、クラブとして地域とどのような連携ができるのか振り返って考え、来年以降も何らかの形で関わっていきたい。
- ・ 学校と話をする時、「親の問題があって、なかなか難しい」という話がよく出て、堂々巡りになる。先だって家庭に対して生活実態に関するアンケート調査を行い、現在集計中である。今後は、親子で参加する事業等を企画し、家庭を巻き込んでいきたい。

○ 伊藤 俊郎 氏

- ・ 現在、中学校の評議員をしている。子どもは言葉で言っても直らないので、学校だけの法律を作ったらという問いかけをした。補導委託で預かっている従業員には、かつて暴走族のリーダーだった者があり、数か月間は猫をかぶっていることができて、体で覚えた行動は必ず出てくる。「二度とするな」と厳しく言い聞かせるが、それでもまたやってしまう時は、5発殴ることにしている。教育の「教」の字は鞭で叩くという意味が含められている。私はこれに則って教育をしている。現在、学校では体罰はなくなったが、全ての子どもを平等に扱うことから、能力のある子どもから不平不満がかなり出ている。一人の子どもが初期の癌のようなもので、初期の段階で処置しないと、体中に広がって大変なことになる。問題行動のある子どもへの関わり方に課題を感じる。給食費を払わない場合、校長先生がその親のところへ行行って話をするべきである。クレーム処理はトップがやるのが基本である。
- ・ 義務教育制度では、陰と陽に分けた対応が必要だと考える。定時制高校から講話を頼まれて行ったところ、半分の子どもは私の方を見ていなかった。定時制高校は、勉強したい人がいくべきところであり、悪の養成所のような状態になっているのなら、一度排除してはどうか。従業員の中にも、働きながら定時制に通った者がいるが、ほとんど続かずやめてしまう。人間は、二つのことを同時に真剣に行うのには無理がある。
- ・ 現場の教員に笑顔が見られない。教員に権限を与えていくこと、PTAが先生を支えていくことがこれからは大事である。

○ 堀田 菜菜江 氏

- ・ 14歳の子どもが父親を殺した事件に、同年代の我が子は衝撃を受けていたようだ。なぜ殺すのだろうか、と最近考えていた。
- ・ 子どもは大きくなると物事の「なぜか」を考えるようになる。その時にどう子どもに寄りそうか、生きる姿をどうやって見せていったら良いのか、改めて悩むところである。自分も子育てする中で、いろいろな悩みがあり、学校の先生にもよく相談し、解決に導いてもらい、助けていただいた。
- ・ PTAでも人間関係が年々希薄になっている。「できれば参加したくない」と言う人が多いが、「PTA活動を通じて、先生のいろいろな面が見られたり、学校の情報もよく得られたりして、得するから是非参加して欲しい。」と私は呼びかけている。どこへ行っても自分の好きなようにそれぞれが行動し、参加したくなければ参加しない。共に歩むということが少なくなり、寂しさを感じると同時に、親子関係で悩みが出てきたら誰に相談するのだろうか。親子が孤立した状況下では、「殺す」というところまですぐに追いつめられてしまうのではないか。
- ・ 人間として、感情をありのままに表現できる親になりたい。自分一人で悩みを抱えず、自ら参加し、力になってくれる先輩を見付けることが大事である。

○ 片倉 敏明 氏

- ・ 大規模校だからこそ、一人ひとりを大切にすることを心がけている。
- ・ キーワードは夢。夢を学校で育むような取組をしていきたい。
- ・ 「チャイムからチャイムまで」を合言葉に、集中力、けじめを身に付けさせることに力を入れている。
- ・ 思うようにならない経験、競争の中で負ける体験、我慢しなければならぬ体験、なにくそ、とがんばる体験を意図的に盛り込んでいくことが、生きる力、たくましさ育てるのに不可欠である。
- ・ 学校に対する様々な要望が家庭から寄せられる。「教育は学校に任せて」と言えるくらいの力を蓄えたいと考えているが、要望の中身をよく見てみると、家庭でしつける部分がかかなり含まれている。生活習慣の問題も含めて、家庭、学校、地域の役割を明確にして、連携、融合していくことが必要である。境界線が見えないままに、家庭や地域から学校にどんどん案件が入ってきて、対応しなければならぬことになっている。

○ 星 良 氏

- ・ 「生きる力」を育てるためには、幼稚園に来るのが楽しい、と思えるようにすることが大事である。
- ・ 人との関わり方を身に付けること、直接体験することを重視して学ばせたい。失敗体験も必要である。
- ・ はやね・はやおき・あさごはん運動には、全職員で取り組んでいるが、地域の実態に合わせた取組が必要である。親の仕事の状況から、子どもを早く寝せると親子の触れ合う時間がない家庭が多い。お母さんに自分の作った作品などを見せようと思って帰りを待っていると寝るのが遅くなる。
- ・ この地域では、祖父母が主に子どもの面倒を見ているので、幼稚園からの連絡が、祖父母にも伝わりやすい言葉や方法で行うよう考えている。

○ 竹田 義務教育課長

- ・ 様々な角度、視点からの意見をいただくことができ、嬉しく思う。
- ・ 登米地域は、学校、家庭、地域社会の連携が、良く取れているところであると認識している。
- ・ 全国学力調査では、宮城県のマイナス面だけが目立ってしまっているが、地域行事や清掃に参加する児童の割合は、全国平均よりも10ポイントくらい高い。登米地域は、県内でも特に高い。部活、運動に意欲的に取り組んでいる割合も高い。これらは一例だが、このように宮城の子どもには良いところもたくさんある。
- ・ 幼稚園教育については、県内の公立120園中、40園で3歳児からの保育が行われている。幼稚園と小学校の関わりを大切にしなければならないが、登米地域では、幼稚園や小学校の先生方が一緒に研修を行うなど、参考にしたい部分が多い。
- ・ キャリア教育においても、伊藤さんのところで中学生の職場体験を受け入れていただき、参加した中学生が、「はじめて本気で怒られた」という感想を述べていた。地域の中で、社会が子ども達を支えている姿がよく見えてくる。

○ 後藤 生涯学習課長

- ・ 生涯学習課では、学校、家庭、地域の連携により子ども達の教育を支えていこうと協働教育を展開している。これは、学校も、地域も、家庭も、それぞれが主体であり、役割を果たすしくみである。登米市では、これまで協働教育に熱心に取り組んでいただいているし、今年度は、文科省の学校支援地域本部の事業にも取り組んでいただくことになった。それぞれの分野での個々の活動実績があつてこそ、活発な協働ができていたのであろう。
- ・ 社会教育がスタートして、40年以上が経ち、社会教育資源がかなり蓄積している。これを再度洗い出し、それぞれを結びつけていくような役割が必要だと思っている。
- ・ 総合型スポーツクラブも、地域の重要な資源であると感じた。PTA、学校とのつながりを持っていただくことにより、地域の活動の核となると思う。他の活動との結びつきがもっと強くなると良いと思う。

○ 三野宮 教育次長

- ・ 様々な実践活動の立場に立った御意見、御指摘をいただき、心からお礼申し上げます。
- ・ 教育は、個人的な営みでありながら、社会の中で生きるための力は、自動的に獲得できるものではなく、社会の中で教えて、育てていかなければならない。そして、次の世代を担っていく子ども達を育てていく。
- ・ 家庭教育、学校教育、地域の活動が全て密接に絡み、総合的に調和して、次の世代に広げていくという形にしていかなければならないだろうと、私自身は思っている。
- ・ 御意見をいただいた中から、どのように本質的なものを抽出していくか、それを言葉でまとめるだけではなく、具体的な施策として何をどのようにしていくか、知恵を出していかなければならないと改めて強く思う。
- ・ 役所的にみんな同じようにやらせるのではなく、それぞれの地域の事情を踏まえて活動するからこそ効果が上がる。施策として全体としてどうするのか、画一的にならないように、結果として今よりもよくなるには、どうしたらいいか、これから真剣に模索していきたい。
- ・ 計画の中間案や素案の段階で、その都度公表していくので、その際にはまた御意見等をお寄せいただければありがたい。

### <傍聴者からの意見要旨>

- ・ 登米市では、小規模校の統廃合が進んでいる。地域、学校、家庭が連携していく場合に、都合の悪い部分がある。職員室の全員が子どもの名前を聞いて、顔が思い浮かび、どこの地区の子なのかがすぐに分かる、地域の人もどの子がどこの誰の孫分かっているという状態が望ましいが、統合した状態では叶わない。また、これまで地域と学校が合同でできていた行事が、統合して地域をまたがるようになったために、一緒にはできなくなっているところもある。教育の内容を破壊する計画とならないようにしてほしい。まずは、足りない人員と予算を確保するよう、計画に盛り込んでほしい。

(6) 気仙沼・本吉地区

日 時：平成20年7月21日（月）14:00～16:00

場 所：宮城県気仙沼合同庁舎4階大会議室（気仙沼市朝日町1-1）

出席者： 教 育 次 長 三野宮 斗 史 意見発表者： 本吉町立津谷幼稚園  
園 長 三浦 三枝子 氏  
教育企画室長 安 住 順 一 本吉町立津谷中学校  
教 諭 菅 原 定 志 氏  
教 職 員 課 学校法人畠山学園 東陵高等学校  
小中学校人事専門監 太 宰 明 副校長 吉 田 俊 雄 氏  
スクールカウンセラー  
義務教育課長 竹 田 幸 正 星 美 保 氏  
気仙沼市青少年育成協議会  
高校教育課長 高 橋 仁 会 長 岡 本 寛 氏  
生涯学習課長 後 藤 康 宏  
南三陸教育事務所長 鈴木 洋 悦

<意見発表要旨>

○ 三浦 三枝子 氏

- ・ 社会環境の変化から、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成長環境に大きな変化が起こっている。その一方で、幼児教育を重視する流れが強まっており、幼児教育が逆風と順風の両方を受けている。
- ・ 教育基本法の改正で幼児教育が明確に位置づけられ、また、学校教育法の改正で幼稚園教育の目標が明記された。
- ・ 子ども達が豊かな幼児期を過ごすためには、公立・私立・幼稚園・保育所の垣根を越えて、さらに様々な立場の方々が知恵を出し合って、より良い環境作りを進める「連携（つながり）」が大切である。
- ・ 当園では、家族の皆さんが幼稚園の活動に積極的に取り組み、子ども達と一緒に参加することにより、幼児の体験活動に多様性や体験の関連性が生まれるような子育て支援活動「家族の知恵袋・レンジャー隊」に取り組んでいる。保護者に、保育とはどのようなものなのかを知ってもらおう絶好の機会ととらえている。
- ・ 家族が子どもの育ちを話題にしなが、「幼稚園が遊びを大切にすることの意味」を理解し合い、保護者同士や地域の温かい見守り環境を作ることで幼児が遊びの体験を通して学びの芽を育むことができると実感している。
- ・ それぞれの世代の視点に立ち、幼稚園の役割と機能をフル活用しながら、子育てに「必要」と「欲求」の見極めを行える幼稚園運営に努めたい。

○ 菅原 定志 氏

- ・ 自分の将来について真剣に考える時期にさしかかっているはずの中中学生であるが、「夢や希望」に向かってがんばろうというよりは、楽しく、楽な方に流されていく傾向が見られ、物事に粘り強く、我慢強く取り組もうとする子どもは年々減少しているように思う。
- ・ 社会の一員としての自覚をもった子ども達に育ってもらうためには、学力の向上も必要だが、その前提に、夢や希望をもち、その夢の実現のために、自分のあり方や生き方を見つめ、考え、自己実現を目指すという「心の教育」が最も必要と考える。
- ・ これには、学校はもちろん、家庭の教育力が担う部分大きい。子ども達の家庭では、携帯電話・ゲーム機などが日常生活に大きな影響を与えている。メールに熱中し、長時間限られた相手との情報交換はしているものの、多くの人との関わりから学んだり、新聞等から知識を得たりすることが少なくなっている。携帯電話の使用について、ルールを作っている家庭は多いとは言えないのではないか。
- ・ 「しつけ」を学校任せにしたり、自己中心的な言動で周りを困らせたり、ルールを無視して自分の都合のよいようにしてしまっている大人の姿を見て、子どもは育っているのである。
- ・ 子ども達の「心の教育」の充実のため、学校でやるべきことと、家庭でやるべきことを明確にし、あり方を再考していかなければならない。



- ・ 「心の教育」の充実とともに、「生徒の安全確保と保護者・学校間の情報伝達方法の確立」が喫緊の課題である  
と考える。岩手・宮城内陸地震発生時、教員7名で50名の生徒を校外に引率していた。災害発生と同時に、携帯  
電話が繋がらなくなったため、家庭との連絡がままならず、保護者はテレビでの被害状況を見て、我が子の安否  
を心配していた。
- ・ 宮城県沖地震の発生が予想される中、生徒の安全確保は最優先に考えなければならない。対応マニュアルを整備  
していても、実際の災害の場面ではマニュアルどおりに事が進まず、臨機応変な対応が求められる。災害が確実に  
起こることを前提として、緊急事態時の学校と家庭の情報伝達の方法の確立は是非必要だと考える。

○ 吉田 俊雄 氏

- ・ 学校法人崑山学園は、昭和23年第二次大戦後の混乱の時期に、女子の職業教育の普及、地域の教育文化の向上  
を目指し、60年の歴史を積み重ねてきた。時代の変遷とともに設置学科の改変を行い、気仙沼女子高等学校では  
普通科、福祉コース、ビジネスコース、英進コース、東陵高等学校では普通科及び特別進学コースを設置している。
- ・ また、国際理解教育、個別指導の重視、部活動指導、大学進学指導等について教育方針を打ち立て、特色ある教  
育を行っており、生徒も各方面で実績を上げている。
- ・ 広範囲から生徒が入学して来るため、在籍する生徒とその親を通じて地域間交流も生まれている。
- ・ しかしながら、全国的に少子化が進む中、気仙沼地区の生徒数の減少も深刻な状況にある。
- ・ 平成22年からの全県一学区制への移行も控え、ますます仙台圏への集中が予想され、ますます郡部の高等学校  
への入学者数の減少が懸念される。
- ・ 公立・私立共に定員確保が困難な状況に対し、早急に改善策を講じる必要がある。仙台圏において宮城県公立  
高等学校協議会で取り決められている公立・私立の収容定員比率を当地区にも導入するなどの具体的な取組が必要  
である。
- ・ 教育振興基本計画の策定に当たり、当地区における公立高等学校定員の適正化を検討いただき、私学も含めた全  
高等学校の定員確保に配慮いただきたい。
- ・ 私学として更に特色ある教育を展開し、地域の教育文化の向上に努めると共に、社会に有為な人材を育成すべく  
努力していく。

○ 星 美保 氏

- ・ 小学校から中学校へ進学して適応するのに苦労する「中1ギャップ」の問題があるが、現代の子どもは、合わせ  
てもらふことに慣れており、自ら環境の変化に合わせていくことが苦手である。
- ・ ゲームやインターネットのバーチャルな世界は、大人にも子どもにも勝手な思いこみを生みやすい。家庭や学校  
は、人間関係を実際のもので見て、肌で感じられる所である。成長段階にいる子ども達には、いろいろな体験の中で  
人と関わらせていきたい。体験こそ、社会性を育てるチャンスである。
- ・ 家庭は、安定したシステムであるが、子どもの問題が発生すると、変わらざるを得ない状況に追い込まれていく。  
どこをどのように変えていくかを家族や本人と一緒に考え、変化に付き合うのがカウンセラーの仕事である。
- ・ しかし、孤立している家庭、介入を拒む家庭がある。福祉・警察・児童相談所・学校・医療などの機関が連携し  
ていかなければならない。
- ・ 思春期の子ども達と接して感じるのは、親に全てをゆだね安心できるという「基本的信頼感」が満たされな  
いまま育ってきたのではないかということである。親への思いが届かない、受け止めてもらえず苦しいと悩んでい  
る子ども達が、その不安定な気持ち故に人との関係で傷ついたり、上手く付き合うことができない。
- ・ 親自身も悩みながら一緒に成長していく場面をカウンセリングの過程で見ることもある。
- ・ 情報量が多い今だからこそ、正しい家庭教育は自然に身に付くと考えるのではなく、情報を共有できる仲間を持  
つことが子どもと向き合える親を育てるために重要である。子どもとの関わりやしつけの事などを話せたり、考え  
たり出来る家庭教育事業の充実を望む。
- ・ モンスターペアレント問題については、学校への不信感の積み重ねや、親の未成熟、モラルの低下が要因と考  
える。日ごろから顔を合わせ、話し合うことが対応として必要である。親の話をよく聞き、ねぎらうことが大切であ  
る。参観日や懇談会はいいいいチャンスである。例えば給食試食会などを企画し、学校に来やすい雰囲気作りをする。
- ・ 時には指導主事の先生方も参観日に来ていただき、親の様子なども見てもらえれば、学校現場をより理解いた  
だけると思う。
- ・ 心に残る言葉を子どもにかけ、普段から子どもとの信頼関係を作って欲しい。そうすることが問題の予防になる。
- ・ 未来の親になるために、赤ちゃんとのふれあいの体験をさせて欲しい。世話をすることを通じて、赤ちゃんは愛

される存在であるということや、自分も大切に育てられたということを感じ取ることができ、子ども達の心に残る体験になる。

- ・ 小学生は、心のサインを訴えてくるので、親も教師がその時にきちんと向き合っただけで対応することが大切である。
- ・ 中学生になると、大人に相談しにくくなり、問題が内在化、複雑化しやすい。担任の先生だけでなく、教科や部活動でも何気ない声がけをするなど、さまざまなチャンスを捉えて関わっていくことが必要である。
- ・ 学校でいじめ、家庭で虐待を受けている場合、地域が無関心なら子どもの育つ場所はどこにあるのか。それぞれの場所において、子ども達と関わる大人が増えていくことが大切である。「子どものために」と立ち上がる大人達の力が必要である。

#### ○ 岡本 寛 氏

- ・ 会社経営をしており、社員教育、後継者教育の面で感じていることも含めて話したい。
- ・ 気仙沼市青少年育成協議会には、52団体が加入しており、連絡、提携しながら健全育成を目指そうと、「明るい楽しい家庭づくり」、「明るい住みよい地域づくり」にがんばっているが、世の中は反対の方向に進んでいるように思える。
- ・ 主な事業は「青少年健全育成推進大会」、「家庭教育大会」などを開催し、講師を呼んで大勢で話を聞いている。
- ・ 学校、家庭、地域の三位一体の教育体制が、国の計画でも重点として書かれているところだが、家庭があり、学校と地域がある。家庭が最も重要であり、家庭教育が全ての教育の根幹である。もう少し学校教育中心の施策から家庭教育や地域教育を含めた特徴ある施策を考えても良いのではないか。
- ・ 共働き、母親不在が家庭崩壊の原因ではないと言われていた。母親が一定時期に子育てに専念できるような支援を行う教育施策を宮城県として打ち出してはどうか。
- ・ 犯罪、非行に走る比率は、共働きの家庭が一番高く、母子家庭が一番低いと言われている。女性差別だという人もいるかもしれないが、この辺りを応援する施策を含めていただきたい。
- ・ 学校の役割は、学力や知識を付けるだけでなく、集団生活やルールを守ることを知り、癖をつけることだと考える。最近の子どもは、人間関係を上手く築くことができない。新入社員を見ていても、それを感じる。
- ・ 地域との連携を深めるために、地元出身の学校の先生の比率を高める、子育てしている一定期間は単身赴任をやめさせるなどということも、具体的にできないことはないのではないか。可能であれば、宮城県の計画だけでもこういうことを入れたら面白いだろう。
- ・ 小学校、中学校の教育が一貫していると、親密で安心感、一体感があって良いと考える。人間関係の構築にもつながる。
- ・ 先生の資質の向上について、使命感や職業観が先生に限らず、今の若い人に欠けていると感じる。教育委員会の人が謝っているシーンばかり子どもがテレビで見ているのはどうかと思う。マスコミから批判されても、言うべきことは毅然とした態度で言うような教育者であって欲しい。モンスターペアレント問題もあるが、この言葉を使うと意味が呆けてしまう。バカ親と言ったほうがいい。ニート、援助交際などという軽い言葉の使い方の氾濫も、子ども達を変な方向に向けていくのではないか。
- ・ 地域の教育力については、プライバシー問題や、訴訟社会がネックとなることがある。簡単な名簿すら作れない、行事を行おうにも「怪我をしたらどうするんだ」と言われる。昔と違って、まとまりにくい社会になってきている。地域の教育力を高めるにも、ボランティアでは頼めなくなり、予算が嵩むようになってきているのかなと思う。
- ・ 三位一体の教育を行うには、文章だけでなく、予算化された施策を盛り込んでいただきたい。

#### <意見交換> テーマ 社会全体で教育の向上に取り組むために

～家庭、地域の教育力を強化するためには何が必要か～

#### ○ 安住 教育企画室長

- ・ 貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 国がこのたび策定した教育振興基本計画では、全体を貫く基本的な考え方として「横の連携：教育に対する社会全体の連携の強化」を挙げており、示された4つの基本的方向性としても「社会全体で教育の向上に取り組む」を第1番目に掲げている。さらに、特に重点的に取り組むべき事項として9つが挙げられている中にも「地域全体で子ども達をはぐくむ仕組みづくり」がある。

- ・ このような点について、皆様と議論したいと考えた。また、本日は、主に地域、家庭の連携、家庭教育の重要性に関する御意見を多数いただいたため、このようなテーマを設定させていただいた。改めて、意見交換テーマについて御意見をいただきたい。

○ 三浦 三枝子 氏

- ・ 問題が起きてからではなく、起きる前に予防することが大事である。そのためには、家族のコミュニケーションの基本となる「言葉」を大切にしていかなければならない。言葉の持つ意味、相手の気持ちを早いうちから理解できるような関わりを家族で積み重ねていくことがとても大事である。
- ・ 言葉で感情を伝えることなど、子どもがまだ小さいから、そんなことを教えてもまだ伝わらないと考えていては、その時その時の体験を飛び越えて小学校に入学することになってしまう。そうすると心が伝わらなくなったり、問題が起きやすくなると思う。

○ 菅原 定志 氏

- ・ 地域や家庭の上に成り立っている学校は、地域、家庭と連携することが不可欠だが、学校からの投げかけが重要だと考え、我が校では、次の2つの取組を行っている。
  - ①地域の方々をゲストティーチャーとして招く  
地元の伝統芸能の指導をしていただき、子ども達が笛を習得して発表する。地域の一員である自覚と感謝の気持ちを育てることがねらいである。
  - ②保護者道德の時間  
夜間に集まって、持ち寄った子どもの小さい時の写真をプロジェクターで拡大して映し、「うちの子自慢」をしてもらった。子どもの小さい時の写真を見ると、みんなが笑顔になる。「今、この笑顔で子どもに接していない」と気づく保護者が多かった。また、写真を選びながら子どもと会話できたのが良かったという保護者もいた。
- ・ このように、身近なできることからやっていくことが、学校と保護者をつなげるパイプの太さになる。何事もやってみないことには分からないし、やりながら修正し、継続すべきところは継続するという方針でやっている。教員側の気付きがたくさんあり、学校の教育力も高まっていると思う。子育てのネットワークづくりにもなる。

○ 吉田 俊雄 氏

- ・ いかに教育内容を充実させるか、ということに全力で取り組むことが重要と考えている。
- ・ 国際理解教育の一環として、高校2年生がロンドンに修学旅行に行っている。大英博物館で、教科書で見た4大文明の写真の実物を目の前にした生徒達の感動がはっきりと伝わってくる。その後の学習意欲に影響を与えている。外国の政治経済や英語に対する関心が特に高まっている。
- ・ 生徒だけでなく、保護者の国際理解にもかなりつながっている。
- ・ 部活動で、試合の応援、活動の援助を行う父兄会があり、指導教員との個別面談の機会を設けている。健康相談を含め、家庭での食事についての相談、学習との両立に関する悩み相談が多い。この面談は、教師と保護者が一緒に子どもの教育を考えるために役立っている。これからも積極的に取り組んでいきたい。

○ 星 美保 氏

- ・ 私が弱小野球チームの監督だったら、と例えて考えてみた。ルールを教える、技術を教える、練習を強化するなどいろいろなことができるが、監督として子ども達からの信頼がないと何をやっても伝わらない。「この人の言うことなら信じられる」というような気持ちを持たない限り、子ども達はなかなか付いてこない。普段の何気ない会話、あいさつ、目と目を合わせるということの積み重ねが大事である。
- ・ 近頃は、簡単なことができずに、難しいことができるというアンバランスな子ども達がいる。
- ・ 親以外の人から褒められることは、子どもがとても喜ぶ。そのような体験が子どもの自身につながる。いろいろな人達が子どもを見て、親同士仲良くやっていくことも教育力を高めることにつながるのではないか。

○ 岡本 寛 氏

- ・ 「社会全体の教育力の向上」は、あくまで結果であるべきだと思う。部分的に教育力を高め、連携が図られて、初めて社会全体の教育力が向上するのであって、文章としては聞こえがいいが、これをお題目にしてしまうと目的と手段が逆転する。教育をするのは、基本的には親、家庭だということをはっきり強調したほうが、具体性があって良い。

- ・ 人と人とが接点を持ち、コミュニケーションを高めるための地道な活動として、イベント、講演会など、さまざまな取組を行っていくことが大切だと思う。
- 竹田 義務教育課長
- ・ スクールカウンセラーの星さんからのお話に関連して、中1ギャップについてお話したい。中学1年生の問題行動等は、小学校6年生の件数の3倍に跳ね上がる。たとえば、いじめの認知件数は、小6で170件だったものが中1では700件に、不登校は133人から500人に、暴力行為は15件から50件に増加している。
  - ・ 中1ギャップの原因は、中学校に入った途端に、学級担任制から教科担任制に変わる、学習内容が難しくなる、先輩、後輩など人間関係が変わるなど、様々なことが原因となっていると考えられる。その解決のために小中の連携、人間関係づくりの能力を高めること、社会的スキルを高めることなど、きめ細かな指導をこれまでも各学校で行ってきているところである。
  - ・ 県でも、平成19年度から中学校1年生で35人学級を実施した。また、小学校5・6年生を対象にして小学校16校で教科担任制モデル事業を実施している。これらの効果を確認めながら、中1ギャップの解消に今後も努めていきたい。
- 後藤 生涯学習課長
- ・ 協働教育、社会教育を担当している立場から、教育振興基本計画にどう表現するかは別として、考えるところをお話する。
  - ・ 家庭教育そのものを型にはめたり、「こうあるべき」と言うことができないのが一番難しいと感じるところである。これまでの施策上は、周辺のサポートであり、この基本は変わらないと思う。
  - ・ また、理想的な家庭から理想的な子どもが必ずしも育つわけではないという話もあり、日々頭を悩ましている。
  - ・ やはり、学校と家庭の役割を明確にすることから始めることが大事で、やり方は個々の家庭によって異なるということだと思う。
  - ・ 子どもの時代に自己肯定、自己容認をしっかり固めることにより、他者肯定、他者容認につながるということを再度確認する必要がある。
  - ・ 地域教育、家庭教育の悪い点にばかり注目が行きがちだが、課題は課題として取り組みつつも、基本的なことは今もしっかり行っているということも認めていく必要がある。
- 高橋 高校教育課長
- ・ 学校、家庭、地域での役割の自覚、明確化と連携をさらに密にしていく必要があるということが本日の御意見を共通して流れていることだと思った。
  - ・ 「地域の子どもを地域で育てる」という基本認識は、公立も私立も関係なく、全く同じように考え、しっかり育てていくことが大事である。その中で、公立は公立の特徴、私立は私立の特徴をしっかり打ち出しながら、魅力ある学校づくりを進め、子どもを社会に貢献する人材に育てていくことが重要である。
  - ・ 生徒が減少していく中に、公立と私立の協調の仕方については、大きな宿題だと思っている。これらは、公立と私立の協調を話し合う協議会において、さらに議論を続けていきたい。
- 太宰 教職員課小中学校人事専門監
- ・ 本日の御意見を聞いていて、学校に入る前の段階での関わり、特に母子関係の大切さを改めて感じた。
  - ・ 今一番欠けているのは、人の心と心の触れ合いである。人と人との関わりを持ち方を、大上段に構えずに、さりげなくやっておられる実践例をご紹介いただき参考となった。
  - ・ 地元の先生の割合を多くするというご提案があったが、子ども達が一生懸命な地元先生の姿を見て、暖かく見守られていることを感じ、「おらほの先生」ということで、確かに良いことだと思う。
- 三野宮 教育次長
- ・ 様々な実践活動を踏まえた御意見、御指摘をいただき、心からお礼申し上げます。
  - ・ 教育、子育ては、個人的な営みでありながら、社会の中で生きていくための力をつけなければならないし、次世代の人材に対する社会からの要請もある。
  - ・ 教育についての考え方は、百人百様であるが、その本質は、それほどバラバラではなく、収れんされていくものではないかと思っている。御意見をいただいた中から、本質的なものを読み取り、現実に子ども達の教育を変えて

いくことにつながる施策を見出していく努力を我々がしなければならないと思っている。

- ・ 本日いただいた御意見は、審議会に報告し、計画に活かしていく。また、計画の中間案や素案の段階で、その都度公表していくので、その際にはまた御意見等をお寄せいただければありがたい。

#### <傍聴者からの意見要旨>

- ・ 多くの県民の意見を聞いて、それを計画策定に活かして欲しい。
- ・ 人材を育てるという視点でなく、主権者たる国民に育てていくという視点が必要だ。
- ・ 教員たちが必死にがんばっているということを理解していただきたい。
- ・ 母子家庭や、話をなかなか聞いてくれない家庭に、自己責任論を当てはめるのは間違っている。
- ・ 少人数学級を実現するために、教員を増やして欲しい。
- ・ この地域は、教育力の「強化」以前に、賃金が低いという問題を抱えている。全県一学区になっても、気仙沼から仙台や古川に通わせるのはお金がなくてできない。収入が足りないから勉強させてあげられなと親が子どもに告げなければならないことになる。
- ・ 「はやね、はやおき、あさごはん」を実践したくても、12時間、13時間働かないと生活が成り立たない家庭がたくさんある。そのような中で、教育力を強化して欲しいというのは無理である。
- ・ 幼稚園などの幼児教育への金銭的な補助、保護者の教育費の負担軽減を計画に盛り込んでいただきたい。

(7) 栗原地区

日 時：平成20年7月27日（日）10:00～12:00

場 所：宮城県栗原合同庁舎 3階第1会議室（栗原市築館藤木5-1）

出席者： 教 育 次 長	三野宮 斗史	意見発表者：	栗原市PTA連合会
教育企画室長	安住 順一		会 長 石川 和彦 氏
教職員課長	安井 順一郎		栗原市立若柳中学校
義務教育課長	竹田 幸正		校 長 千田 哲 氏
高校教育課長	高橋 仁		栗原市こども会育成連合会
生涯学習課			会 長 後藤 哲弘 氏
社会教育専門監	渋谷 秀昭		栗原市スポーツ少年団
北部教育事務所	栗原地域事務所長		副本部長 鹿野 有三 氏
	佐藤 福実		栗原市社会教育委員
			菅原 敏元 氏

<意見発表要旨>

○ 石川 和彦 氏

- ・ 国の計画に「子どもの学ぶ意欲や学力・体力の低下，問題行動，家庭・地域の教育力の低下などの課題がある。」と記述があるが，私は，「地域との関わりの希薄化」が問題であると思う。
- ・ 何かをやり遂げた感動や達成感が子どもを育て，親や地域の人達を育てるものだと思っている。
- ・ 金成の小学校の事例を以下に紹介する。  
「豊かな表現力を育てよう」を目標に掲げ，ミュージカル，歌，マット運動などに地域の協力を得ながら数年前から取り組んでいる。学芸会では，マイクを使わず，生の声で演じる。3年生の時には内向的で声が出なかった子どもが，6年生になる時には，堂々と大きな声で発表するようになる。私自身，発表を見て，鳥肌が立つくらい感動した。この小学校では，子ども達の学力が向上し，全国学力調査の結果も全国平均を上回った。さらに，物事に取り組む姿勢が変わったように思う。
- ・ 金成にグランドゴルフ協会という，地域のコミュニティがあり，小学校のグラウンドで練習をしている。この協会が，子ども達にゴルフを教えてくれたり，学校のグラウンドを草取りしてくれたりして，つながりができてきている。
- ・ 3年前からやっている地域・学校合同運動会では，子どもには関わりのない年代になっている方たちが，子どもたちをにこやかに見守っていた光景は感動的であった。
- ・ 子どもから大人が教えられることはたくさんある。アルゼンチンのサッカー協会が，観客が減っていることで悩み，対策を一般公募したところ，小学生から「ゴールポストを50cm広げる」というアイデアが出て，これが採用された。これにより，試合での平均得点が2倍になった。
- ・ 地域，親たちは，子どもに恩返しをしなければならない。恩返しを受けた子ども達は，大人になった時，またその子どもに恩返しをするであろう。子どもは親の背中を見て育つ。良い背中を見せていきたい。

○ 千田 哲 氏

- ・ 学校経営のキーワードとして，「安全・安心・充実」を掲げ，これを肝に銘じ，教育に日々取り組んでいる。
- ・ 義務教育では，「わが子の健やかな成長，将来の社会的自立」が，親，地域社会，学校の共通目標であると私は捉えている。心身共に健全な社会人としての基礎形成を全国一律に保障するのが義務教育の基本的スタンスであり，「個性の伸長，特異な人材を育成する」のは，中学校でも視野には入れても，高校や高等教育が担うべきものであると認識している。したがって，地域間，学校間の競争は，義務教育になじむものではなく，義務教育の所期の目的の達成のために，子どもの実態，地域の特色に応じて，協働して進んでいく必要がある。
- ・ 就学義務について，認識が薄い保護者が多くなってきているように思う。義務教育の初期の段階で保護者には良く理解させることが必要である。
- ・ 学校教育目標は各校が育むべき児童像・生徒像である。その具現のためには，教員，児童・生徒，保護者，地域が目標を共有し，連携して取り組むことが重要である。しかし，その目標理解・啓発が不十分ではないかと懸念している。加えて，評価可能な目標でなければ，児童・生徒の変容を適正に看取ることができない。教育基本法を踏まえ，学校教育目標を評価可能な目標の視点で精査する必要がある。

- ・ P T Aの本気度と職員のやる気を引き出し、相互に作用し、高め合っている。
- ・ 部活動において、外部コーチの強力な支援体制ができている。さらに、医師、管理栄養士、警察の生活安全課、子どもセンターの職員の講話をいただいて、我々ができない部分のケアを支援いただいている。
- ・ 経営コンサルタントなどを招いて、社会の実情や、自立するための基本的な心構えの教育をしていただくことを考えている。
- ・ 本校では、4年間で100人、1/4の子どもが減り、これに伴い職員定数が減っているため、様々なしわ寄せが来ているが、中でも部活動は顧問の配当や、安全管理を含め、危機的な状況にある。
- ・ 基本的な生活習慣の確立「はやね・はやおき・あさごはん運動」は重要だが、中学校で徹底させるのは大変難しい。スポーツ少年団などで遅くまで練習していることから、「はやね」はできない現状がある。また、メールやゲームなどを午前1時、2時までやっている生徒が見受けられる。家庭生活の部分であるので、親の管理責任だと訴えているが、中学生になってから親が急にコントロールしようとしても無理である。基本的な生活習慣の確立は切実な問題であり、早い時期から保護者への啓発を図るとともに、小・中学校共に課題意識をもって取り組む必要がある。
- ・ 中学校における学力向上の目的は、進路指導の視点で、個々の生徒が次のステップである高校での学びを深め広めるために必要十分な基礎学力や学ぶ意欲の形成と捉えている。その意味で、小学校でも、子ども一人ひとりの中学校での学びを見通した取組が必要である。
- ・ 中1ギャップ、ニート・フリーター問題に対しては、キャリア教育を強力に推進することで、解消していかねなければならない。
- ・ 推薦入試制度についても考えていく必要がある。
- ・ 教員の大幅な超過勤務の実態がある。
- ・ 新研修センターと免許更新制との兼ね合いをどうするのか、今後の課題だと思っている。
- ・ 人事異動方針も要検討である。教頭が、土曜の朝地震が来ると駆けつけられない実態がある。
- ・ 今回の地震を経験して、地震の時の学校の役割、地域との関係を明確にしないといけないと感じた。

#### ○ 後藤 哲弘 氏

- ・ 新学習指導要領では、「ゆとり教育」の十分な検証がないままに、学力向上を推し進めようとしているが、このことは学校現場に混乱を招かないか疑問である。
- ・ 自己制御能力、社会性がないまま大人になり、衝動的に人を傷つける、動機が見えない殺伐とした事件が多発している。
- ・ 今日の日本に足りないのはシステムではなく、「心」である。豊かな心を育てることが何よりも大事である。子ども時代に子どもらしい体験を欠いて大人になってしまっている。
- ・ 昭和30年代、映画「オールウェイズ三丁目の夕日」の舞台になった時代には、地域にいろいろな人が当たり前だった。現在は、すぐに異質なものは排除しようとする社会である。
- ・ 子どもが失敗から学ぶことが大切である。「つまづいたっていいじゃないか 人間だもの」など、相田みつを氏の言葉に「失敗から学ぶ本当の教育」があると考えます。
- ・ 競争社会、経済至上主義の中で、将来に夢や希望を持たない「自己肯定力が欠如している」子どもが、ネットの世界にのめり込んでいる。
- ・ 幼児期の群れ遊びを通じて、仲間との協調性、ルールの大切さ、自然との共生、命の尊さなどを肌で感じさせ、本当の「生きる力」を身に付けさせたい。これを目指し、「子どもの手による子ども会」の取組を行っている。
- ・ 学力世界一のフィンランドでは、森で自由に遊ばせることで豊かな感性や創造性、規範意識を学ばせ、けんかの時も子ども同士で解決するのを待つ。
- ・ もう一度、幼児期から子どもと真剣に向き合うことを考えたい。

#### ○ 鹿野 有三 氏

- ・ 栗原市スポーツ少年団は、現在90団、団員1,600人で構成される。指導者は400人程度いる。栗原では、子どもが減っているにもかかわらず、スポーツ少年団への加入率は上がっている。団の大きさや活動内容は様々であり、団員数の減少から、複数の団が合同で活動しているものもある。
- ・ 各小学校に栗原市スポーツ少年団の一覧を配布し、教室に貼るなどして周知している。
- ・ 指導者の高齢化、幽霊指導者の存在、女性が少ない、などの問題があり、指導者不足が課題である。
- ・ 中学校の部活動は、生徒数の減少により、また、顧問の先生の割り当てが難しいため、廃部・休部となるものが多くなってきている。小学校時代にせきかくスポーツ少年団で活動していても、中学校ではそのスポーツができない

いということが少なくない。このままでは、スポーツ少年団の活動、青少年スポーツ活動が衰退していくのが目に見える。

- ・ 栗原市唯一の総合型地域スポーツクラブ「しわひめスポーツクラブ」を立ち上げ、志波姫体育センター施設の指定管理者、公民館の体育事業の運営なども受託した。志波姫の全ての部活動に外部指導者を配置し、部活動にはない競技も設けている。
- ・ 地域ぐるみのお祭り「カリヨンフェスティバル」や芋煮会などの行事も行っている。
- ・ 経済的にも自立できる地域に根づくスポーツクラブが2つでも3つでも増えて、地域ぐるみのスポーツの振興が図られればよいと願っている。

○ 菅原 敏元 氏

- ・ 社会教育委員の立場から、以下重要ポイント3点についてお話したい。
  - 1 教育予算の充実
  - 2 保護者（地域の大人）と教員の資質向上
  - 3 社会教育、学校教育、地域力の融合
- 
- ・ 経験で培われる所の右脳と左脳の間にある想念体（帯）が、「できること」を「できない」と判断させてしまい、それが、前例踏襲など、今の官僚の悪いところを生み出している。
  - ・ 「はやね・はやおき・あさごはん」がなぜ良いのか、半数以上の保護者は理解していないと思慮される。。
  - ・ 立場的に、学校の先生の苦勞が良く見える。未成熟な地域の保護者も多く、先生の時間を奪い、結果、心を病んでいる先生が少なくない。
  - ・ 「できない」ではなく、「やれる方法」を考えてほしい。
  - ・ 今回の地震でも、縦割行政の弊害が見えた。雇用促進住宅が空いていて、国費を浪費せずすぐに入れるのに、国交省からの資金でなければならぬと、仮設住宅をわざわざ作り、そこに住らなければならぬと聞いた。法律は理解するが金銭の処は一つである。
  - ・ 学校には「分かる授業」を大いにやって欲しいが、それだけでは人は育たない。
  - ・ 学校地域支援本部事業は、絵に描いた餅にならないよう、現場で動いている人から話を良く聞き、横の連携を強化し、思い切った宮城独特のシステムを作り、進めて欲しい。「どうやったらできるのか」に時間を割くのが重要である。

<意見交換> テーマ 社会全体で教育の向上に取り組むために

～学校、家庭、地域の協働を進めるためには、何が必要か～

○ 安住 教育企画室長

- ・ 貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 国がこのたび策定した教育振興基本計画では、全体を貫く基本的な考え方として「横の連携：教育に対する社会全体の連携の強化」を挙げており、示された4つの基本的方向性としても「社会全体で教育の向上に取り組む」を第1番目に掲げている。さらに、特に重点的に取り組むべき事項として9つが挙げられている中にも「地域全体で子ども達をはぐくむ仕組みづくり」がある。
- ・ このような点について、皆様と議論したいと考えた。また、本日は、栗原地区の教育に関わるトップの方々に出席いただいているので、それぞれの役割や連携のあり方について、御意見をいただきたいと考え、このようなテーマを設定させていただいた。
- ・ 意見交換テーマについて御意見をいただきたい。

○ 石川 和彦 氏

- ・ 個人的な意見だが、小学校に英語の授業を導入することには反対だ。地域との関わりに取り組むことの方が大事である。

○ 千田 哲 氏

- ・ 10年前と比べると、学校支援はかなり進んできている。理解されている傾向にある。



- ・ 国が考えている「学校運営委員会」にはリスクがある。まずは、教員の意識改革が必要である。まだ段取りが面倒くさいなど、敬遠する体質がある。教員にゆとりがないからである。中学校も少人数指導で時間がない。これには、教員を増やすしか解決策はない。
- ・ 学校は、いつでも参観ができるようにしているが、なかなか保護者は来てくれない。学校の実態を見ようとは思っていないようだ。
- ・ PTA会報は、保護者と課題を共有するための手段でもあるのだが、なかなか見てもらえていない。

○ 後藤 哲弘 氏

- ・ 不登校がどんどん増えている。学力向上熱、競争意識が格差を生んでいる。
- ・ ジュニアリーダーを行う子どもが減っているが、ジュニアリーダーをやった子は、社会に出てから管理職になれる子ども達だ。評価の対象として見られないので、いきいきと活動している。
- ・ ガキ大将がいなくなった。規範意識が薄れている。
- ・ 開かれた学校と言いながら、実際には閉鎖されている。ある学校の教頭から「PTAがあるのに何故子ども会が必要なのか、学校に来て説明しろ」と言われた。心を作らずに学力向上を推進してもどうにもならない。
- ・ 道草を食いながら学校へ行くべきだ。今時の親は、「責任もってくれるのか。心配なので、スクールバスを運行しろ。」と言う。
- ・ 学校教育と社会教育の人事交流を積極的にしていただきたい。

○ 鹿野 有三 氏

- ・ 中体連、高体連はいつまで続けるのか。仲間づくり、共にならば、達成感を得るため、部活動は有効だとは思いますが、部活動が教師の多忙化の一因になっている。スポーツ、部活動は地域に任せてはどうか。このような方向に進めば、指導者にもプロが育ってきて、競技力の向上にもなる。
- ・ 子どものスポーツの世界にも格差が生まれている。卓球を例にとると、個人戦上位の子は卓球塾に通っている子たちである。

○ 菅原 敏元 氏

- ・ 社会教育委員としての活動について、市では年2～3回の会議を開くだけである。会議の少ない理由は、「委員報酬がそれ以上出せないから。」これでは何も出来ない。委員の本音を集約して言うと「議会対策に利用されているだけ？」
- ・ 生涯学習の様々な制度は、全ての住民が平等に受けられるようにはなっていない。一部の恵まれた人だけが参加できるものになっていないか。ボトムアップで行うことが必要だ。今が変える時期だ。

○ 竹田 義務教育課長

- ・ 率直な御意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 栗原地区は、学校のPTA活動等がうまくいっていると聞いている。いじめ、不登校など問題行動も比較的少ない。知・徳・体子ども達にバランス良く育てていくのが教育行政の仕事と考えている。
- ・ 学校の質を向上させることが、様々な問題を解決するためには大切である。そのためには、各学校の主体的な取組が第一であり、さらに高めるために、他の組織の助けも必要である。
- ・ 小学校英語活動について御意見があったが、現在97パーセントの小学校で英語活動に既に取り組んでいる。年間5時間から35時間と、学校によってバラつきがある。栗原地区は、最も積極的に行っており、今年度は、全学校が取り組んでいる。表現力の向上もねらいの一つである。平成23年4月からすべての5・6年生で35時間の英語活動が実施される。県教委としては、栗原地区の英語活動の実践を参考にしたいと考えている。御協力いただきたい。

○ 渋谷 生涯学習課社会教育専門監

- ・ 協働教育を担当している立場でお話したい。
- ・ 協働教育で育つことが期待される力は以下のとおりである。
  - ①子ども達にとって、学ぶ意欲、問題解決、協働する力、地域に支えられているという認識
  - ②地域の人たちにとって、生きがい、人間力
  - ③地域全体にとって、社会資本の充実

- ・ 以上の3つが循環し、地域づくりに結びつくことを目指している。
- ・ 菅原委員が指摘された、協働を進めるポイントに共感を覚えた。お互いに得るところがある「互恵」の事業の展開について、これから考えていきたい。
- ・ 学校地域支援本部事業は、宮城県内8つの市町で取り組んでいただく予定である。文部科学省から示された例は、東京の和田中学校のものであり、宮城県にぴったりとは合わない。宮城県なりにアレンジして、各地域の財産である、PTA、子ども会、ボールスカウト、ガールスカウト、青年会議、婦人会、老人会、文化協会など、全ての人を網羅できるかどうか視点を見て事業を展開できないか検討しているところである。
- ・ 本日の御意見も踏まえ、より良いものを検討していきたい。

○ 安井 教職員課長

- ・ 分かる授業の展開について、県でも学校教育の充実の根幹を成す重要なものと捉えている。昨年度、県教育委員会では、教員の資質向上を考える上で、どのような点に着眼するべきか議論して、指針を新たに作成した。その中でも重視している。
- ・ 子ども達が勉強していて楽しい、あるいは意味があると感じられる授業を教員がもっともっと提供できることが重要と考え、この点について、教員とともに努力していきたい。
- ・ 教員の多忙化についても御意見をいただいた。少子化に伴い、教員の定数が減っていく傾向にあるが、子ども達と触れ合う時間を十分に持つことは大事であるので、いろいろと工夫しているところである。多岐に亘る現在の学校の業務を見直し、優先順位を考えながら、一番大事な業務に一番力を傾けられるように考えていきたい。

○ 三野宮 教育次長

- ・ 様々な実践活動を踏まえた御意見、御指摘をいただき、心からお礼申し上げます。
- ・ 今回の御意見を真摯に受け止めて、今後事務局としてどうしていくかを考えていくとともに、計画策定のベースを作るための意見聴取会であるので、御意見を審議会のメンバーにも確実に伝え、これを材料に議論していただきたいと考えている。
- ・ 行政の縦割りの問題など、心を引き締めなくてはならない言葉をいただいた。自らを戒めて、いただいた言葉を思い出しながら業務に取り組んでいきたい。